

千葉大学工学同窓会々報 47

2020



総合工学科

建築学コース	都市環境システムコース	デザインコース
機械工学コース	医工学コース	電気電子工学コース
情報工学コース	物質科学コース	共生応用化学コース

【目次】

- 1 工学同窓会会長挨拶
- 2 工学同窓会名誉会長挨拶
- 3～4 建築学コース
- 5～6 都市環境システムコース
- 7～8 デザインコース
- 9～10 機械工学コース
- 11～12 医工学コース
- 13～14 電気電子工学コース
- 15～16 情報工学コース
- 17～18 物質科学コース
- 19～21 共生応用化学コース
- 22 凡展／松芸展
- 23 令和元年度工学同窓会事業報告
- 24 2020年度工学同窓会定時総会 開催変更と書面審議のご案内
- 25～28 寄附者一覧
- 28～30 工学部創立100周年記念事業について

2021年、千葉大学工学部は
創立100周年を迎えます

※工学部改組に伴い、学科からコース制となりました。各部会とコースの対応についてはp.24をご参照ください。

千葉大学工学同窓会

ホームページ <http://chiba-kougaku-dosokai.jp/>



会長挨拶

工学同窓会会長 小柴満信 MITSUNOBU KOSHIBA

卒業年／昭和53年 千葉大学工学部印刷工学科卒業
昭和55年 千葉大学大学院工学研究科修士課程修了

◆今の世の中をどう考えるか？：イノベーションと教育

世界に蔓延する新型コロナウイルスの問題は当面解決しそうでない大変な問題です。ワクチン開発で感染症が抑え込めるわけでもありませんし、開発自体も報道されているほど簡単なことではなく、治療法の開発や感染症を扱える医療体制の充実にはかなりの年月を要するでしょうし、我々の社会活動や経済活動への影響はかなりのものだと考えられます。地球温暖化やグローバル化が進む世の中において未知のウィルスや耐性菌などの細菌が引き起こす感染症は人類がこれからも戦っていかねばならない脅威です。

千葉大学においては8月3日から始まる第3タームは引き続き原則メディア授業としつつ、対面授業については最大限の感染防止策を講じながら部分的に実施していく方針だそうです。対面授業を実施する際には、海外にいる留学生の皆さんや持病があるなどの学生の皆さんに配慮しオンデマンド型のメディア授業を併せて提供します。また、若い学生の皆さんが成長の過程で大変重要となる課外活動については、団体毎に作成した活動再開計画書に基づいて感染対策を行い、段階的な活動再開の方針だそうです。

第4ターム以降は、感染拡大の状況を考慮しながら、入構規制の解除に向けて慎重に検討して行くとのこと。新型コロナウイルスの感染が拡大する首都圏に位置する本学では、高等教育のニューノーマル（新常态）に向けて、メディア授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド型の授業等を行うとの学長方針が出ていますが、学生の皆さんの貴重な学びの機会が失われないための教職員の皆さんの努力は並大抵なものではないと思慮いたします。

さて、ポスト・コロナ、ウィズ・コロナという言葉をよく聞きますが、それは世界が抱える本当の課題を隠してしまします。世界が抱える本当の課題は経済危機を乗り切るために世界中で過度な金融緩和や財政支出が行われ、その結果、巨額の債務を政府や企業が抱えることです。もちろんそうするしか選択肢がないことは理解できます。しかし、

そういった政策によって持つ者（個人、国、企業）と持たざる者との格差は更に拡大しています。世界の明確なリーダーが不在のGゼロの時代において、格差の拡大を起点として自国第一主義のような民衆迎合政治や独裁政治が第2次世界大戦の始まった1940年代の様に世界で存在感を増し、グローバル化が巻き直され、世界は分裂する方向に向かっていきます。そして極端な見方をすると中国が米国の覇権や基軸通貨に挑戦し、今が世界秩序の長期的な変化点となっている可能性があります。

残念ながらこれらの世界が抱える課題は世代を超えて全世界が取り組まなければならないものです。そして、今から少しでも手を打たなければ、数年後に世界は1940年代の不幸な歴史を繰り返すのではと大いに不安を感じます。そして、米中の覇権争いの中、地政学的な要衝に位置する日本、そしてそこに生活する日本国民はこの世界の大きな潮流に否が応でも巻き込まれていくことになるでしょう。

このような激動の時代を乗り切るのに重要なものはイノベーションと教育です。そして国家の将来を担う若い世代への期待は今まで以上に大きなものになります。これらのキーワードの共通項は国家の高等教育を担う大学および大学院とそこに学ぶ若者たちです。第2次世界大戦後に日本の目覚ましい成長を支えた高等教育と人材、その供給源としての大学、そしてイノベーションの源泉となる高等教育への社会の期待、そしてそれを担う責務は大変大きいと思います。千葉大工学部の教員および学生の皆さんの今後の活躍に大いに期待をするとともに、工友会として本学工学部の更なる繁栄に寄与していきたいと思っております。

さて、本学部は2021年に創設100周年を迎えます。本会報に皆様からの寄付を募る振込用紙が同封されています。100周年記念事業としては記念誌の発行、記念碑等の設置、講演会などが企画されています。是非とも100周年記念活動へのご理解とご協力をお願いいたします。今後も千葉大学および工学部の発展と飛躍を祈念するとともに、卒業生皆様の工学部同窓会への一層の支援を改めてお願いして、挨拶とさせていただきます。

■経歴

1978年3月	千葉大学工学部印刷工学科 卒業
1980年3月	千葉大学大学院工学研究科修士課程 修了(印刷工学)
1980年10月～1981年6月	米国ウィスコンシン州 州立ウィスコンシン大学大学院材料科学科 在籍
1981年10月	日本合成ゴム株式会社(現:JSR株式会社) 入社
1990年8月	UCB-JSR ELECTRONICS, INC.(現:JSR Micro, Inc.) 出向
2002年6月	JSR株式会社 理事 電子材料事業部 電子材料第一部長
2009年4月	JSR株式会社 代表取締役社長
2019年6月	JSR株式会社 代表取締役会長



ご挨拶

工学同窓会名誉会長
千葉大学工学部長

佐藤之彦 YUKIHIKO SATO

昭和38年 新潟県新潟市生まれ

昭和63年 東京工業大学大学院理工学研究科電気・電子工学専攻修士課程修了
博士（工学）（東京工業大学）

平成29年4月の工学部と理工系の大学院の改組と同時に工学部長に就任し、4年目を迎えました。令和2年度は、この改組後の新しい体制の下で最初の学部生を卒業生として送り出す節目の年です。

本来であれば、この最初の4年間を振り返ってご紹介すべきと思いますが、本年度は何と言っても、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて千葉大学がどのような状況になっているのかをご紹介する必要があります。本年3月の個別学力検査後期日程の入学試験までは、感染拡大防止策などは講じましたが、何とかほぼ例年通り実施することができました。しかし、感染拡大の状況が悪化するに伴い、大学内の日常が次第に失われ、最初の象徴的な事態として、全学の卒業式や学位記授与式が中止となり、各学科単位での学位記の伝達のみが行われました。

令和2年度に入って影響はさらに拡大し、入学式やそれに続くガイダンス等も中止となり、4月8日からはキャンパスの入構規制が実施されました。さらに、授業開始が5月の連休明けにずれ込むとともに、通常の対面式の授業は全面中止となり、7月末の第2タームまでは原則としてオンラインでのメディア授業を実施することとなりました。平日の日中にもかかわらずキャンパス内が閑散としている状況を目の当たりにし事態の重大さを改めて実感しました。特に、本年度の新入生に関しては、入学以来一度もキャンパスに出て来られない状況が続いたため、千葉大学の一員になったことを実感してもらえる何らかの機会が作れないかと考えておりました。8月からの第3タームでは、実験や実習などを中心として対面の授業が一部で開始されましたが、再度の感染拡大を受けて、10月からの第4ターム以降も対面授業への全面的な移行はせずメディア授業と組み合わせる授業を実施しています。工学においては、実験や実習、グループワークなどが学習・教育の効果を高める上で不可欠ですが、感染防止への対応が必要な中で、各教員が色々な工夫をして対応しようと模索しています。

このような状況の中で、本年度から大学全体の新しいグローバル人材育成戦略ENGINE（Enhanced Network for Global Innovative Education）がスタートしています。このENGINEプログラムでは、学部・大学院の全学生に対す

る在学中の留学の必修化、コミュニケーションツールとしての英語教育の強化、情報通信技術を活用したe-learningなどによる「スマート・ラーニング」を3つの柱としています。コロナ禍にあって、実際に海外と行き来する留学は、しばらく実現できそうにありません。今後の見通しが立たない状況の中で、留学に代わって海外経験を積ませる代替プログラムの開発を進めています。一方、スマート・ラーニングについては、本来は留学中でも千葉大学のキャンパス内と同様の授業を受けることのできる教育手段として整備を進めることとしていましたが、コロナ禍でオンライン授業の実施が迫られたため、当初の予定をはるかに上回るペースで準備が進み、本年度にこれまで開講した授業の大半で対応ができています。

また、令和3年度にオープンを予定している東京都墨田区のキャンパスの準備も着々と進められています。この墨田キャンパスでは、西千葉キャンパスにはない大きな空間や天井の高い空間があり、大規模なプロジェクト型教育の展開など新たな可能性をもたらすものです。このキャンパスは千葉大学全体の新しいキャンパスですが、具体的な活用イメージが明確にできる工学系における活用が先行して計画されており、中でもデザインや建築、イメージング科学の分野におけるプロジェクト型の教育・研究での活用を考えています。

以上のように、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、千葉大学も大きく変わりつつあります。こうした中で、教員と学生、あるいは学生同士が直接交流できる環境での授業や実験、実習、研究室での活動など、これまで伝統的に続けてきた大学教育の重要な要素を再認識しています。本質的に重要で今後も継続すべきものは何か、この機会に新たに見直すべきものは何か、を原点に立ち返って考え直すチャンスと捉えて前向きに取り組みたいと考えています。また、学内外の会議もオンライン化が急速に進みましたが、このことは卒業生の皆様と大学の距離を縮めることができる状況になったとも考えており、卒業生の参画を得た何か新しい取り組みを始める絶好の機会とも捉えております。今後とも、工学同窓会の皆様のご理解、ご支援を賜りたく、宜しく願いいたします。

建築学コース

■ 建築学コースの近況報告

2020年度の建築学コースは、学部生315名（1年生70名、2年生78名、3年生79名、4年生88名）、大学院は139名（修士1年生52名、2年生60名、博士課程27名）、教職員のほうは2020年3月をもって上野武教授、中山茂樹教授がご退官、また、2020年4月より安森亮雄教授がご着任され、20名という構成となりました。ただ、コロナ禍で前期の始業は5月、その後も非対面での講義が続いており、新入生は大学への登校ができませんままとなっています。いつもは学生の活気あふれる製図室もガランとしています。

非対面での講義では、ビデオなどの講義資料を閲覧し課題を行うオンデマンド型が主となっておりますが、設計演習や大学院生向けの講義ではビデオ会議など双方向型も取り入れられています。後期も原則非対面での講義となることが予定されており、学生間のコミュニケーションの形成や、卒業設計や卒業論文などの実施に向けた検討が行われているところです。

2020年9月8日～10日に千葉大学西千葉キャンパスでの開催が計画されておりました日本建築学会大会

も感染防止のため中止となりました。2021年度は東海エリアでの開催が準備されており、本学での開催はしばらく先のこととなりそうです。（加戸 啓太）

■ 教員・学生の活躍

- ・千葉県芝山町千代田地区を対象とした将来像提案に関する展示会・発表会が2020年2月21日～23日に開催され、3年生11名と大学院生2名が同地区の将来像を提案しました。
- ・杉山遥さん（吉岡研）がインテリア学会大会で学生発表奨励賞を受賞しました。

教員・学生の活躍はコースウェブサイトにも掲載しております。→ <http://www.archi.ta.chiba-u.jp/>

■ 訃報

前田孝一先生が2019年5月14日（享年69歳）、上杉英樹先生が2020年6月11日（享年78歳）にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

退職のご挨拶

教授 上野 武

私の元々の専門は建築設計ですが、千葉大学へは建築計画研究の第一人者である服部岑生先生にお声掛けいただき1998年10月に工学部デザイン工学科助教授として着任しました。2020年3月まで21年5か月勤めたこととなります。



着任当初は、建築設計教育に携わりながらキャンパス計画推進室（当時）を兼務して、西千葉キャンパスに隣接する東京大学生産技術研究所西千葉実験所が千葉大学に移管されることを想定したマスタープランを3年間で作り上げることでした。しかし、その計画が早々に中止となってしまい、活動の軸足を千葉大学の施設マネジメント計画策定に移すことになりました。NetFM（2001）というWEBを利用した施設実態調査システムが現在も使われていますが、この時作ったもので、その後全国20の国立大学でも利用されるようになりました。この間、日本建築学会のキャンパス計画に関する小委員会立上げに関わり、大学キャンパス計画と都市を研究するきっかけを得ました。

国立大学法人化（2004）からは、学長直轄のキャンパス整備企画室専任教員となり、工学部を兼務しまし

た。服部先生、倉阪先生と立ち上げた環境ISOキックオフ宣言（2004）、川瀬先生と構築したNEDO補助金を活用したエネルギー使用料量の見える化システム（2006）は、今も千葉大の施設マネジメントの要になっています。

キャンパス計画研究を通して、文部科学省「戦略的キャンパスマスタープラン策定の手引き（2010）」の作成に関わることができ、その成果を活かして千葉大学キャンパスマスタープラン2012を策定しました。全ての部局と対話しながら将来を構想するというこの時の経験が、日本学術会議提言「我が国の大学等キャンパスデザインとその整備システムの改善にむけて（2017）」に活かすことができたのはとても良い経験でした。また、2000年に基本構想を策定した附属図書館の改修増築計画が、2012年によりやくアカデミックリンクとして竣工したのは嬉しい思い出です。

2017年からは工学研究院専任となり、キャンパス整備企画室長を兼務することになりましたが、大学内や学外で実践してきた成果を、さらに教育・研究に活かすことができたのは大きな喜びでした。コロナ禍の影響で学生達と最後に一献酌み交わせなかったのが残念ではありません。

現在は特任教員としてキャンパス整備企画室の業務に専任していて、来年4月の墨田キャンパス開校準備、今後15年程度をかけて進む予定の工学部再開発計画の策定などに取り組んでいます。もう少しだけ大学にいますので、よろしく願いいたします。

退職に際して

教授 中山 茂樹

長い期間、千葉大学にお世話になり、2020年3月に定年退職しました。退職にあたり、建築系学科の研究と教育について感じていたことの一端を申し上げたいと思います。



工学部における研究といっても広い範囲があるでしょうが、少なくとも私がかかわってきた建築計画という領域の研究は、実際の建築づくりと切り離すことはできない、ある意味“実学”と言ってよい領域だと思います。これは、真理を追究する理学の研究とは異なるものなのではないでしょうか。つまり、「現場感」の重みです。いきおい実務者との協働での作業が多くなり、時には研究者という立場を越えて、建築づくりに参加することもありました。その中で研究テーマを見つけるということも通常の活動の一環でした。一方で、建築づくりには常に「なぜその形が必要か」を問うてきました。その答えを導き出すために調査を行い、分析し、普遍性を見つける努力をしてきました。

こうした一連の作業は、他の学科や学部の方たちには少し理解を得にくいところがあるようです。研究の成果として、最も分かりやすいのは論文数でしょうが、建築の場合、論文はもちろん重要なのですが、社会への接点・発信・貢献といったことも研究そのものと密接に連携しているのです。社会とは建築づくりだけとは限りません。他の領域とのかかわりといったことも含みます。

この辺りを建築系以外の方たちに説明できたかという点、私自身の力不足でかないませんでした。これからさらに建築系で活躍される教員の皆さんにはもちろん、実務で活躍している卒業生の方々にも応援していただきたいと願っています。

2月に最後の海外出張に出かけ、直後に北海道の調査旅行を計画していましたが、これは中止となりました。以来コロナ禍において、卒業式や修了式が取りやめになりましたが、私の最後の務めと計画していた研究室卒業生へメッセージを伝える会をはじめ、一連の行事も中止となりました。定年退職したのか、在宅勤務なのか、けじめのない中、いささかの戸惑いがあります。科研プロジェクトが継続しているので、しばらくは研究生生活を続けます。

在職中、多くの先生方、それに事務職員の方々の支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

着任のご挨拶

教授 安森 亮雄

本年4月に建築学コース教授に着任いたしました。全学ではキャンパス整備企画室も兼担いたします。これまで、東京工業大学の博士課程、助教を経て、昨年度までは宇都宮大学で准教授として11年間在職しました。専門は、建築設計・都市デザインで、研究活動と設計活動をフィードバックさせながら活動しております。建築と都市の関係性を軸に、次の3つのテーマで展開しています。



①建物と空地の構成： 建物とその周囲の空地（オープンスペース、ヴォイド）の関係は、建築設計を都市に開き、都市空間をミクロな視点から捉え直すもので、「最小の都市空間」とも言えます。東京の市街地や、勤務地であった栃木県宇都宮市などの地方都市の空洞化も背景に、空地の形成過程等を含めて研究してきました。また、都市河川や空き地を活用した、新たな居場所や風景づくりにも関わっています。

②大学キャンパスの空間構成： 大学キャンパスは、多くの建物があり、学生・教職員・外来者・地域住民も含めて多様な活動が展開する「都市の縮図」です。近年の大学の社会貢献や教育研究の変化もふまえ、校舎、建築群、オープンスペースも含めたコモンスペースを中心に研究し、校舎の設計や改修などの実務にも関わって参りました。キャンパス整備企画室の一員としても、より良い将来像に貢献させて頂く所存です。

③地域素材の連関： 近年、地域の再生や、建築の地域性が着目されており、地域の素材には、産業、建築、町並みなど、物から都市までの「素材を通した連関」を見ることができます。前任の宇都宮大学では、大谷石（おおやいし）の建築や町並みの調査を行い、最近では、日本の「石のまち」という視野で、千葉県房州石や各地とも連携しています。また、こうした素材を活用したセルフビルドや建築設計も行っています。

これらの研究・設計では、建築と都市の空間構成に軸足を置きつつ、時間軸や、人間活動、物質性など、従来の空間主体の類型学（タイポロジー）を深化させることを意識しています。また、現地調査（フィールドワーク）を多く行い、自治体や、NPO、関連産業と連携し、学生と共に活動してきました。今後は、千葉大学のミッションを踏まえながら、グローバルな展開も視野に展開して参りたいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

都市環境システムコース

■ 都市環境システムコースだより

学部コース長（学科長）（教授）丸山 喜久

卒業生の皆様、こんにちは。令和2年度の都市環境システムコース学部コース長を務めております。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、新入生ガイダンスをはじめ夏休み期間のオープンキャンパスなど様々な行事が中止となってしまいました。普段であればこれらの行事では、学部コース長として何かしらのご挨拶を申し上げなければなりません。人前でしゃべるのが得意ではない私にとって非常に大きな悩みの種でしたが、行事の中止という思いもよらない出来事によって、なんとか御役目を免れてきました。このため、今回の「都市環境システムコースだより」が、学部コース長らしい最初の仕事となります。

私は2005年3月に千葉大学工学部に助手として採用され、都市環境システム学科・コースで約15年間、教育研究を行っております。気がつけば1998年に発足した都市環境システム学科の歴史の2/3ほどは見てきたこととなります。私が採用された当時は、都市環境システム学科はAコースとBコースの2つの教育カリキュラムを持ち、工学部の社会人教育を一手に担っていました。その後、社会人教育のニーズの変化に伴い、大学院博士前期課程と学部3年次編入に社会人枠を設けるようになりました。2017年からは工学部が1学科9コースに再編され、都市環境システムコースは社会人教育を担う特別な位置づけではなくなりました。

2020年4月時点の都市環境システムコース・学科の学部生は、1年生52人、2年生57人、3年生61人、4年生74人となっております。昨年度までは、100人程度以上の卒業生を輩出してきましたが、工学部の改組に伴い学生数が減少しました。また、私が着任した頃は34人の常勤教員が都市環境システム学科に所属していました。それから数回の学部改組を経て、現在は23人の常勤教員にまで減っております。さらに、6人の教員が、教育担当コースの変更に伴い、来年度から他コースへと異動する予定です。

都市環境システムコースは、都市空間計画、都市基盤工学、都市環境工学、都市情報工学の4つの研究領域から構成されています。現在は工学部の社会人教育

を一手に引き受けてきた名残から、工学の幅広い分野をカバーするような4領域体制となっております。しかし、2017年の工学部の改組を契機として、社会人教育を担う学際コースではなく、工学部の他コースと差別化した基幹コースとなる必要性が生まれました。そこで、2021年度からの都市環境システムコースは、都市空間計画と都市基盤工学の2領域体制とし、都市工学を訴求するコースとして生まれ変わることとしました。魅力ある都市の創造に貢献できるような人材を数多く輩出することを目指して、教育カリキュラムの見直しなどを進めております。教員数が最も多かった時期の半分以下にまで減ってしまう厳しい状況ではありますが、ピンチをチャンスと捉えて、全教員一丸となって取り組んでいきたいと考えております。

現在は新型コロナウイルスの影響で対面での講義ができず、オンラインによる講義を行っております。千葉大学では、受講者が好きな時間に教材を見て学習するオンデマンド型のメディア授業を原則としております。私は、1年生の専門基礎科目と3年生の専門科目を担当しています。パワーポイントのスライドにナレーションを入れて動画を作成し、それを受講者に見てもらっています。教員側も結構な負担増ではありますが、やはり学生への影響は非常に大きいと思われまます。私の講義の最終課題では、感想を書いてもらうことにしていますが、とくに1年生からは、「メディア授業に良い面もあるが、やはり大学に行きたい」という切実な声が多くありました。感染症対策と大学生生活の両立について考えさせられることが多く、もうしばらくの間はこの難問と向き合い続けることになりそうです。

この1年間の教員の異動を報告いたします。2020年3月をもって、小林秀樹先生が定年退職されました。小林先生は2002年に建築研究所から千葉大学に着任され、18年の長きに渡り都市環境システム学科・コースの教育研究にご尽力されました。小林先生はコース運営に当たり常に学生の視点に立ったご意見をお持ちで、当コースの礎を築いていただきました。

最後となりましたが、卒業生の皆様の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。また、都市環境システムコースへのご指導・ご支援を引き続き賜りますよう、教員を代表してお願い申し上げます。

（まるやま よしひさ）

■ 教員・学生の受賞（2019.8～2020.7）

- 丸山愛矢さん（劉醇一研M2年）が、2019年8月9日、化学工学会横浜大会にて学生奨励賞を受賞。
- 西野岳君（檜垣研2018年度修了生）が、2018年7月、電子情報通信学会のライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会にてLOIS若手研究者賞を受賞。
- 池永晶子さん（荒井研M2年）が、2019年9月10日、国際会議IEEE Computer Society Tokyo/Japan Joint Chapterにて研究奨励賞とIEEE Computer Society Japan Chapter Young Researcher Awardを受賞。
- 吉田賢央君（荒井研M2年）が、2019年9月10日、国際会議IEEE Computer Society Tokyo/Japan Joint Chapterにて研究奨励賞を受賞。
- 中田勇介君（荒井研D2年：先進科学）が、2019年9月10日、国際会議IEEE Computer Society Tokyo/Japan Joint Chapterにて研究奨励賞を受賞。

- 北村清也君（荒井研M2年）が、2019年9月10日、国際会議IEEE Computer Society Tokyo/Japan Joint Chapterにて優秀ポスター発表賞を受賞。
- 浪越圭一君（荒井研D2年）が、2019年9月10日、国際会議IEEE Computer Society Tokyo/Japan Joint Chapterにて最優秀ポスター発表賞を受賞。
- 岸川大航君（荒井研M1）が、2019年10月19日、国際会議The 4th IEEE International Conference on AgentsにてBest student paper awardを受賞。
- 石塚美帆さん（内山研B4）が、2019年10月23日、第78回日本公衆衛生学会総会にて優秀ポスター賞を受賞。
- 塩田茂雄教授と坪谷大輝君（塩田研2018年度修了生）が、国際会議22nd International Symposium on Wireless Personal Multimedia CommunicationsにてBest Paper Awardを受賞。
- 和嶋隆昌准教授と坂本和輝君（和嶋研）が、2019年12月9日、骨材資源工学会創立50周年記念式典にて萩原賞（論文賞）を受賞。

■ 定年退職の先生

退職のご挨拶 — 充実した教員生活

小林 秀樹



2020年3月をもって都市環境システムコースを定年退職しました。ふり返れば、2002年4月に筑波にある建築研究所から千葉大学に赴任し、18年間の長きにわたり本コースにお世話になりました。その間、楽しくも充実した教員生活を送ることができましたこと、とりわけ学生の皆さんのおかげと深く感謝する次第です。

さて、今年は、コロナの影響で例年とは異なる退職風景になりました。各種パーティは中止になり、最終講義も2度にわたり延期となりました。準備して頂いた先生方や研究室の学生諸君には、残念な思いをさせてしまいました。この場をお借りしてお詫びするとともに、退職後も元気に社会活動を続けていることをご報告します。

最終講義は、この冊子が発行される頃には実施済みとなる予定ですが、もしかしたら3度目の延期か、それともWEB講義になるかもしれません。WEB講演会は2回経験しましたが、なかなか慣れません。さて、どうなることやら。

■ 多分野の良さをもつ本コースに親しむ

ところで、都市環境システムコースは、現役学生と社会人学生がともに学び、しかも都市に関する多様な専門領域から構成されています。特色あるコースといえます。赴任した当初はとまどいでしたが、しだいに素晴らしい特色だと思えるようになりました。

とくに、私の専門は、住まい・まちづくり分野です。この分野は、実践の現場に出て研究し、活動し、教育します。そこでは、現役学生の斬新な発想はもとより、社会人の経験がものを言います。研究室では、現役学生が社会人から経験を学び、そして、社会人は現役か

ら刺激を受けると、大変よい相乗作用が生まれていました。

また、住まい・まちづくりの実践では、多様な専門領域が当然のように求められます。都市や建築の空間計画から構造や耐久性の知識、さらに環境配慮はもちろん、地域の情報ネットワークの構築も課題になります。この点で、多様な専門領域を学べる本コースは、実社会の要請にうまく応えているといえます。

研究は細分化を求め、実践は総合化を求めるといわれます。後者を体得できる場として、本コースは大きな可能性を持っていると思うわけです。このような思いは、私の専門分野に由来することはもちろんですが、今後の工学系の教育研究の方向を示しているのではないのでしょうか。数年前に日本学術振興会で工学系全体の若手審査を担当したことがありましたが、本コースでの経験がとても役に立ちました。

■ OB・OGとともにコースの行方を見守る

もちろん、深く探求するために専門化も重要です。恐らく、学部では総合化、大学院では専門領域の深化という選択が一つの結論になるでしょう。都市環境システムコースは、それを先取りした教育研究の実践として、OB・OGの皆さんはもとより、私にとっても有意義な場となりました。

今後、都市環境システムコースは、専門領域を絞り込む方向で再編が進む予定です。確かに、多分野の総合化は、教員がそれに対応できなければ、バラバラという欠点が表面化します。その点で、教員の資質が問われ、その負担も大きいものがあります。しかし、これまでOB・OGの皆さんが築かれた現役と社会人の交流、多分野総合化の経験は、各方面で参考にしたい本コースの財産といえます。

私の定年退職は、ちょうど社会人教育が終了し、専門分野の絞り込みが始まる転機にあたっています。私自身は、再編後のコースを経験することはできませんが、OB教員の一人として、コースの行方を見守りたいと思います。

（こばやし ひでき）

デザインコース

■ 今年度の動向

意匠形態学研究室 令和2年度コース長 久保 光徳

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。今年は4月から異例のことが続き、ようやく今このご挨拶文を書きながら、そして松韻会館の森から聞こえてくる夏を惜しむようなセミの合唱を自然音としながら、ここ5か月間を振り返っております。皆様、いかがお過ごしだったでしょうか。

デザインコースでも他コースと同様に、オンライン、オンデマンド形式の講義・演習を余儀なくされ、4月の当初は8月になればどうにか動けるのではとの思いもあり、前期の演習科目の多くが8月、9月の集中開講に変更されていましたが、この時期になってもやはり同様な状況にあります。しかしながら、先生方の工夫、受講生の適切な動きの中で、単に授業が遅延するのではなく、新しいやり方で、そして新しい観点での授業が展開されているようです。学年が高くなるほど研究室とのつながりも強く、このような状況でも早々にゼミは進み、研究室それぞれに様々な取り組みは滞ることなく、むしろ新しい視点での高効率な教育・研究の可能性も見えつつあるようにも思えます。その一方で、おそらく普通の大学生活に希望を膨らまして西千葉キャンパスを訪れようとしていた新入生の心が気になっているところですが、今年度の一年次担任である人間生活工学研究室の下村先生が、その若さと行動力でしっかりとサポートされているようです。

最近では、デザインに入学される学生さんもさらに多様になってきています。一般入試の前期日程に加え、今年からは総合型選抜との名称に変更されていますが10月に実施されますAO入試、そして、3年次編入学試験と先進入試（飛び入学）と、学部入試だけでも多様です。大学院入試でも4月入学に加えて10月入学も次第に一般化しつつあり、さらに多様な人材の動きがあり、今年のような状況においてもその動きは留まることなく前進しているようです。今年も昨年同様に、博士前期課程、後期課程ともに7、8月実施分の入試は問題なく終えることができました。

就職の状況も、聞こえてくる範囲では例年通りのように感じています。本年3月に卒業した学部学生の進路では、留学生を除くデザイン学科の68名の卒業生の内、進学が39名、就職が25名（調査時点での未定4名）でした。また、大学院博士前期課程（修士）の留学生を除く修了生44名については、全員が就職しています。このように、学生の就職については近年おおむね好調な状況にあると言えます。

昨年度のコース長をご担当されました人間情報学研究室の岩永先生からお知らせがありましたが、デザイン・リサーチ・インスティテュート（dri）の設立と墨田キャンパスの開校が来年度に迫ってまいりました。設立準備に奔走されているコンテクスチャルデザインの樋口先生、環境デザインの原先生、そしてシステムプランニングの小野先生を中心に、さらに具体的なカリキュラム構成、運営方法などが検討されています。西千葉でのデザイン教育および研究の良さを生かしつつ、新キャンパスでの新しい教育と研究の革新的な融合が期待できるものと考えています。墨田キャンパスを拠点の一つとするdriは、より開かれたデザイン実践を可能としてくれるものと考えています。これからも皆様からのエールとともに、この歴史あるデザインコースの発展を形にしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

環境デザイン研究室 准教授 原 寛道

墨田区に千葉大学のキャンパス（略して墨田キャンパス）が2021年4月から利用開始されます。これまで、同窓会会報で何度かこの内容に触れてきましたが、今回は、直前ということもあり、具体的な教育研究活動の例をお伝えしたいと思います。私は、環境デザイン研究室の教員ということもあり、墨田キャンパスでは、施設計画に関わる研究として、クリエイティブ家具のプロジェクトワークを進めています。また、墨田キャンパスは、施設そのものだけでなく、立地がリッチです。西千葉キャンパスとは異なり、商店街や、住宅街、

町工場、小中学校、児童館など、多様な利用者が密接に関わる場所に位置しています。そこで、まちづくりと関係づけたプロジェクトワークとして、街ナカ植物工場、子ども商店街のためのシステムと什器などのデザインを進めています。

クリエイティブ家具のプロジェクトワークは、オフィス家具の代表的企業である㈱ITOKIと共同研究を進めています。クリエイティブということは、究極に主体的な状態であると考え、デザイナーの名品家具で囲まれた状況ではなく、自分たちで学ぶ環境を作ることが重要であると結論づけました。そこで、木材規格品の2×2材で自分たちの家具が作れるジョイントシステムを開発しています(写真1)。この家具が使われる場所は、墨田キャンパス5階の学生が60名ほど集いデザインワークをする場所です。この場所から、墨田区に関わるプロジェクトだけでなく社会全般に影響を与える新しいデザインが生み出されるはずです。

街ナカ植物工場の取組は、健康建築を意味する「健康」の実現を目指している㈱竹中工務店との共同研究で進めています。デザイン学科(デザインコース)では2009年以来、園芸学部と共同し、植物工場のデザインを進めてきています。環境デザイン研究室では、これまでも様々な試みをしてきており、それらをアドバンスインテリアグリーンと称して、植物工場をより身近な存在にしていくことを努めてきていました。その中でも、植物は人をつなぐ媒体として非常に有効であるという調査結果から、立場の異なる人々が栽培と活用を通じて健康になるための家具型植物工場と活用プログラムのデザインをしています。墨田キャンパスがあるエリアは、元気な中小企業や、商店街があります。

また、下町ならではの人の繋がりがとても貴重な財産となっています。このつながりを、植物を介して活性化していくことをめざし、墨田区で最も元気な工場で有名な㈱浜野製作所のオープンイノベーションスペースに街ナカ植物工場を設置(写真2)、また、近くのコミュニティ施設である八広地域プラザ吾嬬の里にも同様に設置し、互いに協働しながら活用することで、先端技術の工場の技術者と地域の住民のつながりが実現しました。

子ども商店街の取組では、日本で元気な商店街30選に東京都内で唯一選ばれた「下町人情キラキラ橘商店街」と共同研究を行い、空き店舗を研究室で借り上げ、活動を進めています。ここでは、商店街の後継者や若者離れが課題となる中、子どもたちが自分たちで商品を作り、子ども通貨を発行し、子ども同士で売り買いをするという場を作り、商店街に活気を与えています(写真3)。



写真2



写真1



写真3

機 械 工 学 コ ー ス

■ 機械工学コースだより

コース長 中本 剛

令和になって2年目の今年は、昨年の希望に満ちた令和元年とは打って違ってしまいました。3月の卒業式や修了式は全員で集合することもなく少人数ごとに分散して開催しました。入学式も開催することができませんでした。

このような状況ではありますが、3月には学部4年生84名が卒業し、修士2年生62名が修了しました。社会に旅立って行った卒業生、修了生はいわゆるコロナ元年の新入社員となったわけです。昔から会社で花の何年組と呼ばれている世代は不景気の年が多いと聞いております。この未曾有の困難を逆に糧として社会で逞しく伸びていくことを願っています。

教職員では機械実習工場で数年にわたり非常勤の技術職員として勤務された小栗幸宣さんが定年退職されました。小栗さんは千葉大学工学部機械工学科の先輩でもあり、これまでのご貢献に感謝申し上げます。

一方、4月には学部の新1年生が81名入学し、修士の新1年生が61名入学しました。新たに千葉大学に入学した学生の教育は私たち教職員の使命です。残念ながら第1ターム～第2ターム（4月～7月、従来の呼び方だと前期とか春期に相当します）は対面式の授業ができずに、メディア授業となっていました。教員は授業のための電子ファイルの作成に忙殺されて、学生はコンピュータのモニターを見ながらの学習です。夢を抱いて千葉大学に入学した大学1年生は特に気の毒です。授業だけでなく、例えば大学院入学試験も一部の学生のためにインターネット受験の対応をしなければならず、他にも前例のない業務がとて多回数か月でした。

第4ターム以降（10月以降）は一部で対面式の授業を行うことができます。しかしながら多くの授業はメディア授業が継続されます。今後の数年間はコロナウイルスへの対応のもとで授業を継続しなければなりません。この状況で学生に対する教育と指導の方法を構築することも教職員の使命と考えています。

各研究室では研究活動を再開しています。ただし研究室でのいわゆる三密を避けるために教員、学生ともに苦労しているのが現状です。コロナウイルス感染拡大の状況にあってもどのようにして研究活動を継続して研究成果を上げるかも教員の手腕にかかっているといえます。

このように困難な状況ですが教職員ならびに学生は日々、努力を重ねております。今後とも同窓会の会員の皆様にはいろいろな面でお世話になることが多いと存じますが、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

さて、来年2021年9月5日～8日に日本機械学会の年次大会が千葉大学で開催されます。来年のコロナウイルスの感染状況によって従来通りの開催となるか、もしくはインターネットによる開催となるのかはまだ決定していません。機械工学コースでは武居教授を中心として準備を進めています。従来通りの開催となりましたら同窓会の会員の皆様には是非、母校にお越しいただければと考えております。インターネットによる開催となった場合には是非、アクセスしていただけると、ありがたく存じます。

最後になりましたが、同窓会の会員の皆様のご今後のご健勝とご活躍を願っております。

■ 教員・学生の受賞（2019年9月～2020年8月）

- ・西岡宣泰君（博士2年・森田・比田井・松坂研）：『ベストポスタープレゼンテーション賞』、精密工学会、2019年9月。
- ・中田敏是助教：『千葉大学先進科学賞』、千葉大学、2019年9月26日。
- ・徳永大二郎君（修士2年・森田・比田井・松坂研）：『Young Researcher Award』、The 8th International Conference of Asian Society for Precision Engineering and Nanotechnology (ASPEN 2019)、2019年11月。
- ・河西高志君（修士1年・大川研）、ほか：『SI2019優秀講演賞』、第20回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会、2019年12月27日。
- ・川村拓史君（博士1年・森田・比田井・松坂研）：『研究奨励賞』、精密工学会、2020年3月。
- ・徳永大二郎君（修士2年・森田・比田井・松坂研）：『三浦賞』、日本機械学会、2020年3月。
- ・鶴本克幸君（2017年修士修了生・坪田研）、坪田健一教授：『日本機械学会賞(論文)』、日本機械学会、2020年4月。
- ・村山友太君（博士1年・劉・中田研）：『日本機械学会 若手優秀講演フェロー賞』、日本機械学会、2020年5月28日。

■ コロナ禍での第1～第2ターム授業を終えて

教育委員 鈴木 智

中本コース長のご挨拶の中でも触れられておりますが、今年度の第1ターム～第2タームは新型コロナウイルスの影響で対面での講義ができなくなりました。そして、それを受けて機械工学コースの授業においても、メディア授業をはじめとした対応を余儀なくされました。ここでは、機械工学コースの教育委員の立場から、コロナ禍におけるコースの対応の実際と今後の課題・可能性について私見含みですがご報告をさせていただきます。

新年度がはじまって早々、学生の入構制限が始まったため、ガイダンスを対面で行うことができず、当初は履修登録等に関するトラブルが多く出ることが懸念されましたが、各年次担任の先生方のご尽力のおかげで幸いにも大きな混乱を招くことなく授業開始を迎えることができました。

一方、コースの講義科目においては各科目を第1、第2タームに実施するのか、第4、第5タームに移動して実施するのかという選択を迫られることとなりました。特に機械工学コースでは、第1、第2タームに実施を予定していた機械工学実験をどうするかという議論がなされ、最終的にはコース長の主導の下、機械工学実験と第4、第5タームの機械設計製図をスイッチし、すべての製図科目を第1、第2タームに実施し、実験科目及び実習科目を第4、第5タームに実施するという対応が取られました。また、第1、第2タームに実

施することを選択した科目は基本的にはメディア授業を行うこととなりました。

メディア授業と一言にいても、ビデオ会議ツールなどを利用して実際の授業と同様に行う双方向型と、講義ビデオ等の資料をアップロードし、学生がそれを視聴するというオンデマンド型があります。このうち、第1、第2タームでは学生の自宅のネットワーク環境に配慮し、後者が実施されることとなりました。

私自身が担当する講義でもメディア授業を実施しましたが、そのなかでメディア授業が含むいくつかの問題を感じました。大きな問題として、教員側からみると講義中の学生の理解度が把握しにくい点、学生側からみると講義中の疑問等を教員に投げかけにくい点などが挙げられます。また、最大の問題は、期末テスト等を実施することができないため公正な成績評価ができないという点です。ただ、こういった制約のある中でも、各担当教員教員が様々な工夫をこらし、授業を行っていたと伺っています。たとえば、チャットを利用して可能な限り授業時間中に質疑応答ができるようにした授業や、スライド説明のビデオに自身が説明する様子を映し出すことで学生が緊張感を持ってビデオを視聴することができるようにした授業などがありました。

ここまで、メディア授業の問題点について説明しましたが、メディア授業のメリットもあります。それは、学生が何度でも講義ビデオを見返して復習ができる点です。実際、私自身が行った講義では、ビデオの視聴回数が最終的には受講者数の2倍以上となり、学生が複数回ビデオを視聴していることがわかりました。このように、いつでも復習できることで理解度が深まったという学生の意見もあります。

様々な観点から、対面で授業を行えるに越したことはありませんが、こういったメディア授業のメリットも生かしつつ、対面とメディア授業を組み合わせた新しい授業の形を今後模索していければと考えております。

■ インテリジェント飛行センター

センター長 劉 浩

2016年頃から、様々な産業用途でのドローンの活用を目指して、「空の産業革命」という言葉が使われるようになってきました。ドローンの産業用途には、観測・インフラ点検・測量・農業・物流・閉所作業などがあります。ドローンは、すでに成熟した自動車や航空機などの産業と比べて、技術的には、安全性や信頼性、耐久性や飛行性能に課題が多く、黎明期の段階にあると言っても過言ではありません。小型無人航空機（ドローンや空飛ぶ車）は、殆ど高度1,000m以下の

空域を飛んでいます。機体が小さく、自然環境や人工的な建造物により生じた空気の乱れを受けて飛行が不安定で落ちやすいため、落ちないためのロバスト性や様々なミッションを効率的にこなす知能性を向上することが大きな課題です。しかし、小型無人機や空飛ぶ車などの未来社会の電動航空機エア・モビリティ基盤産業を目指す新産業創出の観点で、ドローン市場や技術開発は急速に世界的な高揚時期に入っており、これらのボトルネックとなる基盤技術には、まだ理論体系ができておらず、大きな機運と挑戦があります。「空の移動革命」は、拡大するドローン市場の中で、特に人や物の移動に関して、日本で新たな産業を育成できるよう官民協同で取り組まれている目標です。

このような背景を受けて、ドローンなど次世代型UAM（アーバンエアモビリティ）の飛行システム技術を研究開発するとともに関連分野の若手人材を育成するために、2019年10月1日に、千葉大学工学研究院附属 インテリジェント飛行センター（Center for Aerial Intelligent Vehicle、以下：CAIV）が新たに発足しました。現在は、千葉大学大学院工学研究院の教員を中心とした12名の常勤教員と、2名の寄付講座研究員がCAIVに所属しています。CAIVは、自然界の生物を手本に持続可能な技術を生み出す「生物規範工学」と、これまでにない新しい「人工知能」、それに未来志向の「人材育成」を加えた3つの軸を基に、しなやかで強く、環境負荷の低い技術開発を進めていきます。

小型無人飛行機の活躍が期待される低空域（高度1,000m以下）では、複雑な自然環境を巧みに飛ぶために進化した昆虫や鳥がいました。こうした生物の飛行には、風外乱に強いロバストな飛行技術や制御知能、衝突回避知能など、ドローンの解決の鍵となる無数の知恵が隠されています。CAIVでは、これらの飛翔生物の高い飛行性能をもたらしエッセンスを抽出し、環境負荷の低い次世代のドローンを開発し、電動型のエア・モビリティ産業につなげようとしています。

また、CAIVでは、博士後期課程の大学院生を対象とした「インテリジェント飛行プログラム」を実施しています。このプログラムでは、次世代飛行ロボット・小型無人航空機（ドローン）の分野において、理学から工学までを俯瞰できる専門的な研究力、研究を社会的な課題解決に展開する能力、研究を国際的に実践できる能力を高めることを目的としています。対象となった学生には、学際的な研究力はもちろん俯瞰力、コミュニケーション能力、実践展開力などグローバルリーダーとして活躍できる資質を養えるよう、学生が主体的に学習するProject-based learning、海外研究機関における派遣研究、キャリアパスに合わせた研究戦略指導などの様々な教育カリキュラムを提供していく予定です。



インテリジェント飛行センターのロゴ



キックオフシンポジウム（2019年10月11日）

医工学コース

■ 医工学コースの現状

コース長 中川 誠司

医工学コースの前身となるメディカルシステム工学科が2004年度に設置されてから、今年で17年目を迎えます。昨年度は43名が工学部メディカルシステム工学科を卒業、30名が融合理工学府基幹工学専攻医工学コース博士前期課程を修了しました。また、工学研究科人工システム科学専攻メディカルシステムコースから2名、融合理工学府基幹工学専攻医工学コースから3名の学生が博士後期課程を修了しました。

今年度は42名の学部生が医工学コースに入学しました。また、学部2年次には転コース制度によって1名を新たに受け入れ、3年次には高等専門学校から3名が編入学しました。今年度は学部1年次を中口俊哉教

授と吉田憲司准教授、2年次を鈴木昌彦教授と菅幹生准教授、3年次（兼 博士前期1年次）を山口匡教授と大西峻助教、さらに4年次（兼 博士前期2年次）を齊藤一幸准教授と川村和也助教にご担任いただいています。

海外の研究機関との活発な連携は医工学コースの特徴の一つとなっており、例年、多くの学生が共同研究や国際会議への参加のために海外に渡航しています。昨年度も約50件の海外渡航がありましたが、この中には1ヶ月以上滞在して共同研究を行った例や、国際会議に出席し、優秀な発表として受賞を果たした例も含まれています。海外渡航は学生のモチベーションの喚起に大いに役立っており、コースとしても推進して行きたいと考えています。一方、今年度はコロナウイルス感染拡大のために、海外渡航はほぼゼロになる見込みです。このような状況で如何に海外との連携を図り、学生に国際経験を積ませるのか、工夫が必要とされて



学部学位授与式の集合写真（令和2年3月23日撮影）



大学院学位記伝達式の集合写真（令和2年3月25日撮影）

いるように思います。

昨年度末から今年度にかけて、教員人事面では大きな動きがありました。ここ数年、医工学コースでは、定年退官や転出等によって教員数の減少が続いていました。昨年度には2016年度には19名だった専任教員が15名となり、教育や運営面での教員一人あたりの負担が増していました。しかしながら、今年の2月には吉田憲司助教が准教授に昇任されました。教育や運営面において、ますます力を発揮してくださるものと思います。また、今年の7月には、折田純久教授が本学医学研究院から、平田慎之介准教授が東京工業大学から着任されました。折田教授は整形外科医でありながら、工学修士号もお持ちであり、医学・工学の橋渡しが可能な希有な人材です。また、超音波工学を専門とされる平田准教授は既存教員との親和性も高く、教育と研究に大いに力を発揮してくださるものと思います。

本年度も教職員一同、医工学領域の教育・研究の発展と社会貢献に努めてまいります。皆さま一層のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

■ 新任教員自己紹介

教授 折田 純久

2020年7月1日をもちまして、千葉大学フロンティア医工学センターの教授を拝命することとなりました。私は東京大学工学部精密機械工学科（1998年3月卒業）、および東京大学大学院精密機械工学科修士課程（2000年3月修了）にて腹腔鏡操作ロボットや術前MRI画像に基づく脳腫瘍ナビゲーションシステム等の開発、リハビリテーション現場における歩行介助・移送システムの開発に携わりました。修士修了後、千葉大学の医学部3年次学士編入コースの第1期生として千葉大学に入学し、2004年に医師免許取得後は初期研修を経て千葉大学整形外科脊椎外科グループに所属し椎間板性腰痛や関節痛のメカニズム解析を中心とした基礎研究に従事、骨粗鬆化に伴う疼痛の基礎医学的メカニズムの解析にて学位取得後に関連病院と米国 University of California, San Diego (UCSD) 留学を経て、2012年より千葉大学整形外科学教室に勤務、新鮮凍結多血小板血漿にまつわる基礎研究や低侵襲脊椎前方固定術に関する臨床研究を進めて参りました。



整形外科と工学の相性はもともと良好であり、運動器の持つダイナミクスやバイオメカニクス、組織学的特性や神経系の電気学的性質など、医工学連携のテーマには枚挙に暇がありません。また、AI、ロボティクス、ウェアラブル端末開発など、現代のテクノロジーを応用することで実現することが可能なテーマはいくつもあります。一方、いうまでもなく医工学は単なる「医学+工学」ではなく、医学側が発出するニーズを工学側で要求仕様として昇華して協働する、両分野のバランスの取れた融合が重要となります。微力ではございますがエンジニア出身の臨床整形外科医として両分野の間のバランスを取り持ちつつ、実地臨床で応用・実現可能な真の医工学連携を目指して精進していきたく存じます。今後も先生方のご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

准教授 平田 慎之介

2020年7月よりフロンティア医工学センター（総合工学科医工学コース）准教授に着任いたしました平田慎之介です。2009年に東京工業大学で学位を取得し、2012年までは電気通信大学で、その後は東京工業大学



で助教を務めてまいりました。専門は超音波計測および医用超音波で、空中超音波による生体情報の非接触計測、医用超音波画像による組織性状診断や粘弾性計測などの研究を行っております。また2019年度は、客員研究員として英国のインペリアル・カレッジ・ロンドンに滞在し、超音波イメージングにおける超解像技術の研究に携わっておりました。私はこれまで医学と工学を融合した学問分野である医工学の研究を志向してまいりましたが、レガシーな工学部における臨床研究、動物実験などに対するハードルの高さを痛感しておりました。そのため、本センターのような人材、設備に恵まれた環境で、教育・研究を行う機会をいただけたことを大変嬉しく思っております。また、独立して研究室を運営するのは初めてであり、何かと至らない点もあるかと存じますが、スタッフの方々、学生の皆さんと協力して素晴らしい研究チームを作れるよう努力してまいります。最後に、まだまだ未熟者ではございますが、千葉大学のますますの発展に貢献していきたいと考えておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

電気電子工学コース

■ 電気電子工学コース便り

コース長 下馬場 朋禄



今年度電気電子工学コース長を務めております下馬場です。昨年度、一昨年度のコース便りですでに紹介されたように、工学部の改組に伴い、従来の学科はすべて「総合工学科」の一学科に統合され、電気電子工学科は電気電子工学コースに生まれ変わりました。

学生は一年目の共通教育を経て自分の進むべき道を再確認してから自分に合ったコースを選ぶため、より各自の適性に合った工学教育が可能になりました。実際に、他コースからの転入や他コースへ転出する学生がおります。今年は4年目の完成年度となり、改組の成果が問われ、問題点を見直す時期になります。

コース教職員の近況報告ですが、4月1日付で南波聡子技術職員が着任されました。強電系の職務経験を活かした電気電子工学実験での活躍やコース業務での貢献が期待されます。丸田一輝助教がめでたく特任准教授として東京工業大学に栄転されました。新天地で大いに活躍することでしょう。また、長年、コースの運営にご尽力いただいた、電子デバイス工学分野の工藤一浩教授、電気電子基礎分野の鷹野敏明教授、片根保技術職員が今年3月に同時に退職されました。今年度3月末には、橋本研也教授も定年退職される予定です。本稿をお読みの多くの方がご存知のように、橋本研也教授は高周波弾性表面波デバイスの研究で世界的に知られた研究者であり、多くの後進を育成されています。また、今年度から都市環境システムコースの荒井幸代教授にも電気電子工学コースの教育・運営に加わっていただいております。

次に、本コース教職員と学生の活躍ぶりの一部をご紹介します。角江崇助教が令和2年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞しました。小島駿さん（博士後期課程1年、指導教員：安昌俊教授）がIEEE VTS Tokyo/Japan Chapter 2020 Young Researcher's Encouragement Awardを受賞、妹尾克哉君（指導教員：安昌俊教授）の論文がIEICE Communications Express (ComEX) Top Downloaded Letter Awardを受賞しました。

さて、今年の大きな事件はコロナ禍でしょう。この影響はコースの研究・教育にも大きな影響を与えています。今年3月頃から影響が出始め、工藤一浩教授、鷹野敏明教授の最終講義が残念ながら中止になりました。4月の新学期も22日からの開始となり、講義はオンラインで行っております。学生も教員もはじめての状況であり試行錯誤しながら講義を進めているところです。特に問題なのは実験系の科目（電気電子工学実

験など）で、本来は実機での体験が重要な科目ですが、実験室に集まることができません。実験系科目を担当する教職員は大変な時間をかけて、学生になるべく実地に近い体験をできるようにシミュレータや実験データを駆使した実験内容を作成しました。この努力に敬意を評したいと思います。

研究活動も大きな制限を受けています。研究室の学生はなるべく密にならないようローテーションを組む・在宅での研究を行うなどの工夫をしております。実験系の研究室では設備の使用が必須なため、かなりの苦労をされています。また、新入生とはいまだに顔を合わせていない状況であり、就職活動では昨年までの好況とは対症的な状況で、この騒動の影響を感じる次第です。

昨年度から今年度に多くの教職員がコースを離れますが、千葉大学の経営状況が芳しくなく、定年退職された教員の補充は当分見込めない状況に置かれています。また、社会情勢もコロナの影響がまだまだ落ち着かず、景気も急速に悪化しております。また、昨年のコース便りにも書かれていましたが、世界情勢を見ますとアメリカと中国の対立による世界の分断が進みそうで、先が読みにくい世の中になっているという印象です。このような情勢の中でも、教職員一同が一致団結して困難を乗り切る決意です。卒業生の皆様には、今まで以上に温かいご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

■ 定年退職に寄せて 工藤一浩先生



私は1987年2月に千葉大学工学部に職を得て以来ほぼ33年が過ぎ、この3月末をもって定年退職いたしました。まずこの場を借りて、多くの方々にお世話になりましたことに感謝いたします。この原稿では定年退職の挨拶とその後の現況を述べる趣旨ですが、ご存知のように新型コロナウイルス感染騒ぎで3月の会合はすべて中止になり、スケジュール表はほぼ空白になりました。その直後に県を跨ぐ自粛が始まり、この原稿執筆中（8月末）も「コロナ禍」と「炎天禍」の重なる日々です。本来、3月2日は「有機エレクトロニクス研究と人財育成」という題目で最終講義と懇親会を行い、退職後についても客員教授の肩書で、他大学の学生達の教育、研究、ならびに学会、協会での活動に携わる予定でした。そこで、中止になった最終講義で話をする予定の内容を簡単に述べたいと思います。千葉大学での教育・研究面はもちろんですが、学会、協会、国プロジェクトを通じて他大学や企業研究者と

教育者と多様な生活感や価値観に接し、多大な知己を得たことは収穫でした。応用物理学会では創刊75周年にあたり、編集長として記念特集企画でノーベル賞受賞者のインタビューや諸先生から貴重な体験や言葉を聞くことができました。また、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）のプロジェクトで千葉大学の研究拠点で企業研究者と苦楽を共にし、将来の開発像に白熱した議論を交わしました。一方、先進科学センターと高大接続センターにおいては「飛び入学」、「高大連携」、「若手人材育成」といった教育面で他の大学と高校の先生方と議論することができ、今振り返るとこの経験は私の人生を豊かにしたと喜んでおります。色々な教育プログラムで活発な活動をされている反面、休日も返上し参加している先生方が疲弊している様子を見て、本人自身が体を壊しては何にもならないと感じました。教育改革は短期的には結果を生み出すのが難しく、地道な活動の継続と長い経験の上に成り立つものと感じています。まさに新型コロナウイルスとの闘いを見るにつけ、生物の優生な遺伝を残そうという営みと人間の科学技術の進歩との戦いを見るようです。先が見えない現状では、ぶれない長期的ビジョンに立ち向かう努力と様々な意見を謙虚に聞くことが何よりも大切であると思っています。最後に、お世話になった皆様のご活躍とご健康を心よりお祈りしています。本当にありがとうございました。

■ 退職のご挨拶 鷹野敏明



2020年3月末で千葉大学工学研究院を定年退職いたしました。会報紙面をお借りして、同窓会の皆様にご挨拶を申し上げたいと思います。

私が千葉大に来たのは1997年7月ですので、約23年の長きにわたって千葉大にお世話になりました。千葉大に赴任して受けた最初のインパクトは、ちょうど1998年から始まった飛び入学でした。法律などの改正で大学への飛び入学が可能になり、日本で初めてそれを実施するにあたって、電気電子をはじめ工学部・理学部の多数の先生方が、制度設計や入試方法・内容の検討に力を注いでいた様子を見て、初めてのことを実現する大変さとそのご尽力に大変敬服したことを思い出します。

千葉大に来る前は、国立天文台の野辺山電波観測所でミリ波電波を使って天体の観測を行うとともに、観測装置開発などに携わっていました。千葉大に移った後にその経験も生かして、情報通信研究機構などと共同で全く新しい研究、ミリ波の高感度雲観測用レーダの開発に取り組み始めたことも、私の中で大変大きなことでした。この開発は順調に進んでミリ波雲レーダ（呼称：FALCON）は実用化され、その後国立極地研究

所と共同で開発した雲レーダは2013年に北極圏スバル諸島の観測所に設置され定常運用を実現しました。この一連の研究で、私は千葉大で研究・教育を行えたことが本当に幸運だったと思っています。その理由はまず、研究の方向などをほぼ自由に決められた点です。業務としての研究に大きな制限は無く、興味があり、学術的社会的意義があり、得意なスキルを活かして成果が期待できる研究をかけた遂行できるという千葉大での環境は、大変ありがたいものでした。また、学科や学部・学内にさまざまな分野の専門家がいらして、ご教示頂いたり自由に議論できたりしたことも、大変重要でした。さらにもう一つ、毎年数人の学生・院生とともに研究を進められたことです。優秀な学生や個性的な学生、また、研究を進めるに従って学生が成長し、時には「化ける（＝飛躍的に成長する）」学生もいて、手ごたえを感じるのもうれしいことでした。

長きにわたってお世話になりました電気電子の教職員の皆様、工学部の皆様、そして工学部を支えて下さっている同窓会の皆様に深くお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

■ 着任の挨拶 南波聡子氏



令和2年4月1日付で電気電子工学コース技術職員に着任いたしました。東京理科大学理工学部電気工学科で学んだ後、日本原子力発電に勤務し、電気設備の保守・更新計画を担当しました。原子力発電所では定期検査以外で機器を停止させることが難しいため、電動機の振動からベアリングの交換周期を計画する状態基準保全に取り組みました。結婚を機に東日本旅客鉄道に転職し、川崎市の火力発電所で保守に携わりました。平成29年度より新プラント建設プロジェクトに携わり、タービン棟の電灯設備や太陽光発電システム導入計画の設計を行いました。

配属となりました安先生の研究室では無線通信をテーマとした研究内容に取り組んでいるため、学部生とともに勉強しています。

新型コロナウイルスの影響で思わぬスタートとなりましたが、早く研究内容を理解し、学生を支援して参りたい所存です。至らぬ点多いと思いますが、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

■ 編集委員から

- ・博士前期課程1年の島田 一志君が、2019年11月6－8日に開催された国際会議APCC2019においてBest Paper Awardを受賞しました。
- ・修士課程2年の岡本 駿吾君の論文が、Applied Physics Letters誌のEditor's Pick(注目論文)に選ばれました。

■ 情報工学コースの近況

情報工学コース長 川本 一彦

同窓の皆様におかれましては未曾有の災禍にあっても一層ご活躍のこととお喜び申し上げます。本年度は新型コロナウイルス感染症の拡大とともに始まりまして。本稿を執筆している8月中旬でも収束には向かっていません。コロナに始まりコロナに終わる年度になるかもしれません。コロナ禍対応とともにコース近況をご報告します。

【コロナ禍対応】

最初のコロナ禍対応は、昨年度2月末の博士前期課程の中間発表の延期でした。中間発表は、例年、大学院の情報科学・イメージング科学コース共催でポスター発表会—典型的な3密となる形式—として開催しています。つづけて卒業式・修了式の中止の決定がなされました。情報画像学科として最後の卒業式になるはずでした。大学全体の卒業式は中止でしたが、学科・大学院コースの学位記伝達式は、動画配信を利用し3密を避けつつ、開催にこぎつけました。コース公式イベントで動画配信を利用したのは、これが初めてかもしれません。

その後、入学式やコースガイダンスなど新年度イベントが軒並み中止になり、ついに大学への入構規制とオンライン授業（本学ではメディア授業と呼称）への移行が決定されました。新入生が歩き回りももっとも晴れやかで賑やかな4月のキャンパス風景はなく、閑散としたキャンパスに逆に強い印象を受けました。新入生に4月のキャンパスを経験させてあげられなかったことは本当に残念でなりません。感傷に浸る間もなく、新入生を含む全学年での連絡・情報提供体制の構築やオンライン授業への移行準備など、教職員が一丸となって対応することになりました。幸いなことに、情報工学コースの学生のパソコン・固定ネットワーク回線の保有率が非常に高く、さらにITスキルの高い学生・教員も多いことから円滑に準備を進めることができました。

【オンライン授業への取り組み】

ゴールデンウィークが明けると、いよいよオンライン授業が始まりました。多くの教員にとって、はじめての経験でしたが、各教員がベストエフォートで取り組みました。本学がもともと持っている学習コンテンツ管理システムに加えて、Microsoft社やGoogle社の製品群の導入も進み、オンライン授業の体制も増強されていきました。ほぼすべての授業をオンラインで大きなトラブルもなく無事に実施できました。そのなかには、必修のプログラム演習—全員が自宅でコンパイル環境を整える必要がある—もありましたが、完全オンラインが実現できました。本年度作成したビデオ教材やオンライン用課題は、来年度以降の「ニューノーマル」な授業に向けて大きな財産になると考えております。

【ニューノーマルな教育への試み】

オンライン授業として実施できなかったものは実験です。実験に関しては、従来通り対面で実施したほうが教育効果は高いという声はあったものの、担当教員が知恵を絞り、対面とオンラインを併用するハイブリッド型実験として今夏に実施する予定です。また、延期していた大学院の中間発表は、オンラインで開催することになり

ました。学生が事前に作成した発表用動画を一定期間オンデマンドで視聴できるようにし、さらにコメント機能等を使って質疑応答・議論をできるようにする予定です。従来の対面式ポスター発表会より、多くの研究発表をじっくり視聴できるだけでなく、学部生への公開、研究事例アーカイビング、対外的な広報への転用などを通して、コース全体の研究教育の活性化に結び付けることも可能だと考えています。本年度末の卒研・修論発表会の実施については検討中ですが、こういった新たな試みを積極的に導入し、「ニューノーマル」な研究教育に向けて教員一同取り組んでいます。

【コース近況】

最後にコロナ禍対応以外のコース近況についてお知らせします。昨年10月より、小槻峻司先生（令和元年10月千葉大学環境リモートセンシング研究センター着任）に情報工学コースの教育をご担当いただいています。入試関連では、本コースの飛び入学入試に合格した学生が4月より入学しています。将来の活躍が期待されます。さらに、本年度より、プログラミング能力の高い生徒を対象とした総合型選抜の募集も始まります。このように情報工学コースでは、高度IT人材育成のための取り組みを入試段階から積極的に進めています。また、本年度は改組後の情報工学コースとして最初の卒業生を送り出すこととなります。学生授賞等の最新情報はコースwebページに掲載されておりますので是非ご覧ください（<http://www.tj.chiba-u.jp/ie/>）。

来年度は工学部創立100周年目にあたります。記念事業等も計画されています。同窓の皆様におかれましては、ぜひ変わらぬご支援をいただきますようお願いいたします。

■ 大学院イメージング科学コースの近況報告

イメージング科学コース長 溝上 陽子

イメージング科学コースは5名の専任教員、5研究室からなるコンパクトな教育・研究組織ですが、客員准教授として花王の五十嵐崇訓氏に質感設計特論の講義、非常勤講師として元コニカミノルタの洪博哲氏に画像解析の講義をご担当いただくなど、特色あるイメージング科学教育を実現しています。さらに、以前からご協力いただいている国際教養学部の田中緑助教に加えて、今年度から国際教養学部の徳永留美准教授にも、兼務教員として教育・研究にご助力いただけることになりました。また、現在（昨年度から持ち越しとなっております）助教の公募・選考を実施しており、来年度には新助教が加わってさらに充実した体制となる見込みです。

研究面では、学内研究推進事業であるリーディング研究育成プログラムの次世代研究インキュベータ「質感イメージングの創成」プロジェクトの後継として、他大学、他学部との連携をさらに拡大した「質感・情動イメージングの創成」（代表：津村徳道准教授）が始動しました。このプロジェクトには、特任准教授として、元三菱製紙の井上信一氏にご参画いただいております。

これらの研究活動や、5研究室に所属する4年生合同の卒業研究中間発表会など、研究室の垣根を超えた共同研究や学生交流が活発に行われています。また、墨田キャンパスの（仮称）千葉大学 デザイン・リサーチ・インスティ

テュート (DRi) への参画も予定しており、さらに活動を発展させるべく取り組んでおります。

国際交流も活発に行っています。2019年度から、ノルウェーが主体国となって5ヶ国5大学間で実施している“International Partnership for Excellent Education and Research Project ‘MANER’ - Material Appearance Network for Education and Research” (修士課程の学生を対象とした質感に関する教育研究プロジェクト) に本コース研究室が参画しており、2020年度からはフィンランド、ベルギー、フランス、日本 (豊橋技科大学) 間で開始した“Master of Science Program ‘IMLEX’ - Imaging and Light in Extended Reality” (近未来クロスリアリティ技術を牽引する光イメージング情報学国際修士プログラム) の協力校にもなっています。2019年度には、画像・情報系の国際学生交流プログラムであるアジア学生ワークショップも継続して実施し、10月には、約1週間のImaging Sciences Workshop: Exchange program between College of Optical Science and Engineering, Zhejiang University & Department of Imaging Sciences, Chiba Universityを開催しました。浙江大学学部生16名が参加し、講義、研究室見学、文化交流などの活動を行いました。その他、研究室単位でも多くの留学生や研究者の受け入れ、交流を行っています。

最後に、嬉しいお知らせとして、矢口博久名誉教授が、国際色彩学会 (International Colour Association, AIC) の栄誉ある賞・Judd Awardを受賞し、2019年10月にブエノスアイレスで開催されたAIC 2019にて、表彰式と受賞講演が行われましたことをご報告いたします。

教員一同、研究・教育の発展に一層努めてまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

※コースに関する最新情報は、以下のwebで逐次紹介しています。

コースweb : <http://www.tj.chiba-u.jp/imgsci/>

■ 国際学生交流プログラム・アジア学生インフォメーション&イメージサイエンスワークショップ (ASW) の紹介

溝上 陽子

アジア学生インフォメーション&イメージサイエンスワークショップ (Asia Student Workshop on Information and Image Science) は、工学部の画像系・情報系を中心に、アジア各国の大学と行っている短期交換留学プログラムです。派遣プログラムでは、千葉大学生が、各国の交流大学での講義・実験に参加するほか、現地での企業見学、伝統工芸、伝統料理等の異文化体験を積みまます。また、これらの活動を現地学生



ホログラフィー実習

と共同で行うことで、国を超えた絆を結び、国際人としての一歩を踏み出してもらうことを目的としています。本プログラムは、日本学生支援機構 (JASSO) の短期派遣・短期受入プログラムの支援を受けて、2010年から2019年まで、(若干名称を変えながら) 毎年途切れることなく実施しています。タイのチュラロンコン大学と千葉大学との交流から始まり、地道に交流を拡大してきた結果、現在は8ヶ国・地域 (タイ、マレーシア、ベトナム、カンボジア、トルコ、韓国、中国、台湾)、24校が参画する規模となり、参加学生の人数も増加しています。交流分野も、化学系、メディア印刷、芸術科学、電気電子工学、情報工学等、多岐にわたっています。

2019年度には、8月から9月にかけて3週間~1ヶ月程度、情報工学コース、物質科学コース等の学部生および大学院生17名を、タイ、マレーシア、カンボジアに派遣しました。受け入れプログラムは、11月から12月にかけて約3週間にわたって実施しました。タイ、ベトナム、カンボジアから19名の学生が参加し、講義、実験、研究室見学、会社・博物館見学、文化交流等を行いました。2019年度は、残念ながら2~3月の派遣・受け入れがコロナ禍の影響で中止になってしまいましたが、研究室間の共同研究プログラムに参加した学生 (タイ、マレーシア、トルコ、韓国、台湾) も含めて、合計35名を受け入れました。

JASSOの奨学金は学生の旅費のみへの支援ですが、千葉大学国際交流事業・海外との組織的教育研究交流支援プログラム等の支援を受けて、プログラム運営や交流校拡大の取り組みもしています。2019年度には、新たに韓国の蔚山科学技術大学校との交流を開始し、モナシユ大学マレーシア校との大学間協定も締結しました。

本年度は、未だ入国制限が続いており、プログラム実施の見通しは立っておりませんが、今後も継続してアジア地域との交流を深めていく予定です。受け入れプログラムにおいては、会社や学外の方々との交流する機会をさらに増やしていきたいと考えておりますので、同窓会のみならず、ご支援いただければ幸いです。

※ASW活動の様子は、以下のwebで紹介しています。

ASW web : https://www.tp.chiba-u.jp/asw/html/html_jp/



企業訪問時のプレゼン



ASWプログラム修了式後の集合写真

物質科学コース

■ 物質科学コース便り

コース長 Krüger Peter



2017年の改組で旧ナノサイエンス学科と旧画像科学科から作られた物質科学コースは、今年度4年目となり、3年前に入学した学生は年度末に初めて本コースを卒業する予定です。物理学・化学・工学を合わせた

科目を身につけた4年次学生は、今年度初めて物質科学コースの研究室に配属され、多様性に富む研究活動の中、興味のある研究テーマを選ぶことができました。

新型コロナウイルスの影響で、卒業研究のスタートは遅くなりましたが、感染対策を講じながら、6月には、4年次学生と大学院生が研究活動を始めることができました。しかし他のコースと同じく、すべてオンライン授業で行われております。大学は様々なメディアツールを整備し、オンライン授業は概ねスムーズに行われたので、学習的なダメージはそれほど大きくはないと思われま

す。しかし、学生実験の科目は、オンライン授業には向かず、対面授業と比べて実施は非常に難しかったようです。担当教員は創意工夫し、学生ができるだけよい講義を受けられるように配慮いたしました。

また、新入生ガイダンスの一環として、今年度も研究施設見学の予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。新入生は現在8月の時点で、一同に会する機会がまだ一度もありません。対面授業、学生間のコミュニケーション、サークルなど、通常の大学生の活動もできておりません。1年次学生は最も新型コロナウイルスの影響を受けています。

教員の人事については、2020年4月に青木伸之先生は教授に昇任されました。青木先生はグラフェンといった低次元の半導体材料をナノメートルスケールにおける電子性質を調べ、新機能のある電子デバイスを作製するまでの研究をしています。また、7月には宮前孝行先生は産業技術総合研究所から物質科学コースの教授に採用されました。宮前先生は世界のユニークな「和

周波発生」分光法を開発し、固体内部の界面が「見える」ようになり、有機EL素子を研究しています。二人の教授の方へ、おめでとうございます。

残念ながら、非常に悲しい訃報も届きました。坂東弘之助教は7月初めに闘病むなしく亡くられました。19年前に坂東先生は千葉大学に着任し、長い間教育・研究活動に従事していただきました。

坂東先生はいつも明るく元気で、同僚にも学生にも大変人気のある教員でした。若くして亡くられたことに、物質科学コースの教員はじめ皆、非常にショックをうけております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、コロナなど予期せぬことでスタートしている今年度ではありますが、卒業生の皆様には変わらぬご支援をいただいておりますこと、心より感謝申し上げます。コースの更なる発展と学生への教育・研究の充実を目指し、教員一同さらに邁進してまいります。引き続きご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

物質科学コースの新WEBページ：

<https://www.tp.chiba-u.jp/ms/>

■ 新任教員自己紹介

教授 宮前 孝行



2020年7月1日より大学院工学研究院物質科学コースに着任いたしました宮前孝行と申します。専門は、振動分光、非線形分光、表面・界面科学、高分子・材料科学です。前職は産業技術総合研究所で、主に界面計測に関する研究に携わっておりました。ご存じのように産総研では企業との連携を強く推進することを求められますが、多数の企業との共同研究の中で、例えばコンタクトレンズ／水界面分子挙動の解析と、水との親和性に関する研究や、高分子表面の分子配向と

表面処理効果との相関、接着剤界面の硬化挙動のその場解析、有機ELの電荷輸送挙動のオペランド計測技術開発、ビール表面における分子挙動と泡の持続性に関する研究など、広く表面・界面の分子とその物性や機能に関わる研究を行ってきました。例えば、人類は有史以来接着剤を使ってきておりますが、接着剤がくっつくのは何故か？という根本的な問いに科学はいまだ正確に答えられないでいます。ビールの泡は何故あれほど長時間安定に存在できるのか？有機デバイスの長時間駆動による劣化はどこから起こるのか？液体が表面を滑るとき、界面では何が起きているのか？身近な事象で当たり前になっていることでも、実はその原理は誰も説明できないことというのは意外と多いものです。今年はコロナの影響により、教職員はもちろん学生も将来に対する不安が大きくなってきていると思いますが、社会全体が大きく変化する中でも、大学でしか得られない知識を身に着けつつ、果敢に課題に取り組む姿勢を持つよう、一緒に学んでいければ考えております。

このコロナ禍の真ただ中で一から研究室を立ち上げるという、誰も経験したことのないような状況でのスタートですが、限られた状況で何がどこまでできるか、一つ一つ試行錯誤しながら進んでいきたいと思っております。

准教授 劉 醇一



平成27年4月に都市環境システムコースに着任し、令和2年度より、物質科学コースと兼任することとなりました。

これまでの研究では、環境問題やエネルギー問題に対し、触媒化学、化学工学、材料化学の知識や手法を用い、主に未利用熱エネルギーや再生可能エネルギーの有効利用を目指した新しい材料開発を進めてきました。今後も物質科学コースの一員として、国内外の環境問題・エネルギー問題を解決すべく、新しい研究を展開していきたいと考えております。

至らぬ点多いと思っておりますが、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。



令和2年から物質科学コースと都市環境システムコースを兼任することになりました。平成16年3月に京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域・環境学専攻を修了後、平成16年4月から佐賀大学海洋エネルギー研究センターの非常勤研究員として3年、平成19年4月から秋田大学大学院工学資源学研究科環境応用化学専攻の助教として6年在籍し、平成25年4月から千葉大学大学院工学研究院都市環境システムコースの准教授に着任しました。

これまでの研究では、環境・資源・リサイクルに関する問題に、化学工学、地質鉱物学、資源工学、環境化学、材料化学など様々な分野の知識や手法を用いたアプローチを行ってきました。物質科学コースでは、これまで培ってきた多角的な視点を用いながら物質科学の新たなアプローチを探求しつつ、物質科学の専門的な新たな幅広い知識、教養を身に付けて、これまでより一歩二歩進んだ研究・教育を行っていきたくと考えております。至らぬ点多いとは思いますが、何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(わじま たかあき)

■ 訃報

Krüger先生の便りにもありますように、物質科学コースの坂東弘之先生が7月16日に急逝されました。坂東先生は早稲田大学で博士号を取得され、助手、ポスドク、研究員を経て、2001年に千葉大学工学部にご着任されました。以降は教育と研究だけにとどまらず、学生支援委員をはじめとする多くの学内委員を歴任され、さらに2014年からは工学部同窓会委員としてもご尽力いただきました。

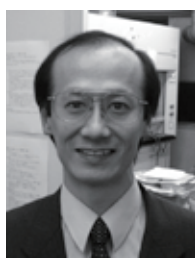
私は学生時代から演習の授業や学生実験でお世話になり、また教員として着任した後は学内業務に関していろいろとお力添えいただいただけでなく、プライベートでも楽しい時間を一緒にさせていただきました。坂東先生の少し高めの声と、親しみやすい笑顔を忘れることはできません。本当に残念でなりません。在りし日のお姿を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

(編集委員・田中 有弥記)

共生応用化学コース

■ コース近況報告

共生応用化学コース 学部コース長 岸川 圭希



卒業生の皆様、お元気にお過ごしでしょうか。日頃から第V部会ならびに同窓会に対してご支援いただき、深く感謝申し上げます。

皆様ご存じのように、新型コロナウイルスの感染が収束せず、9月中旬現在でも、当コースの教育や研究にも大きな影響を及ぼしています。

緊急事態宣言期間（4月7日から5月25日）は、職員も学生も大学への入構は原則禁止となりました。入学式や各学年の前期ガイダンスが軒並み中止になりました。また、当コースで例年4月上旬に行ってまいりました新入生対象のオリエンテーション合宿（岩井海岸1泊2日寝食を共にして仲間をつくる催し）も中止となってしまいました。残念です。9月になった今でも、新入生は西千葉キャンパスに登校できないでいます。1～3年生の大学への入構の解除は10月を予定しているので、やっと新入生と会うことができそうです。

授業は5月上旬よりオンラインで再開しました。千葉大学がネット上に対面授業を補完するツールとして10年前からMoodleというサイトを用意しておりました。これまでも、授業のスライドの配布やレポートの提出などにおいて一部の教員・学生が利用していましたが、4月から大学全体で利用することになりました。大学全

体でリアルタイムの授業をやるほどの通信環境は千葉大にはありませんので、このサイトに資料やビデオをアップロードし、それを学生が視聴しレポートなどの課題をアップロードする形になりました。それでも、たくさんの学生が一度に視聴すると止まってしまうことがあり、学生側でも時間をずらして視聴しなくてはいけませんでした。当コースでは板書で丁寧に授業を行っている教員が多かったので、パワーポイントへの作り直しや音声を取り込んだビデオの作成などで苦労したと聞いております。

学生実験については、当コースでは実際に手を動かして実験することを授業カリキュラムの中で重視しています。しかし、前半の第1～2タームはオンラインで実験ビデオを見てレポートを書き、郵便でレポートを大学に提出するなどの苦肉の策を取らざるを得ませんでした。10月からは対面授業で実際に学生実験ができるようになりますが、白衣に加え、フェイスシールドとマスクを学生に着用させ、距離の確保や換気・消毒などに気を付けながら、安全に実験操作をさせることを計画しています。

就職活動も、3月からほとんどがオンライン化してまいりました。会社説明会はオンラインで視聴、面接も自宅でオンラインとなりました。景気動向の影響で苦戦することが心配されましたが、就活生の健闘もあり、本コースとしては、ほぼ例年並みに内定を得られたように感じております。オンライン面接はやり難いようでしたが、就活期間の交通費は大いに節約になったようです。就活

の詳細は後の当コース就職状況報告をご覧ください。

各研究室では、6月頃から段階的に4年生や修士学生の入室が許可され、細心の注意を払いながら各自の研究を進めています。現在のところ、大きな混乱もなく、実験を行えています。本年度前半は、国内外の学会が中止や延期になり、学生の研究発表の場が少なくなりましたが、後半はオンライン参加できる学会が増え、発表の機会があるようです。本年度も後半は、多くの学生が学会で受賞すると予想しています。これにつきましては、共生応用化学コースのホームページ (<http://chem.tf.chiba-u.jp/>) に逐次掲載されますのでご覧いただければと思います。

今回の状況でも、オンライン利用については、時間等の効率的利用についてメリットもあったように思います。学生においては、就活が自宅のできる、授業視聴時間を自分で決められる、自宅からゼミに参加できるなどです。教員においては、大学内外の会議が自室や自宅から参加できる、オンライン会議の操作やパワーポイントの作成に詳しくなる(?) などです。

このように本コースでも前例のないことに対応する毎日となっておりますが、学生への教育を一番に考え、魅力的な研究成果の発信に努め、今回のことを教訓として、共生応用化学コースの新しい教育・研究のかたちをつくっていかねばと考えております。構成員一同頑張っていますので、引き続き、卒業生の皆様からのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

■ 教員／学生の受賞（令和元年8月以降）

・教員の受賞

上川直文教授（セラミックス化学研究室）：第61回 無機マテリアル学会賞 学術賞

・学生の受賞（口頭発表）

なのはなコンペ2020（学生版）なのはな賞：尾島 匠くん（バイオマテリアル研究室）／第27回 化学工学会関東支部横浜大会 優秀学生賞：中條 雅門くん（環境化学研究室）、学生特別賞：森田 明寛くん（バイオプロセス化学研究室）、中西 輝くん（触媒化学研究室）、学生奨励賞：山本 純平くん（バイオプロセス化学研究室）、Yoo Pyunghwaさん、櫻井 翔平くん（環境化学研究室）／再生医療学会国際学会NCRM NICHE 2019 Best Paper of the Inter-disciplinary Conclave Award：堀 有音くん（バイオプロセス化学研究室）／第28回 有機結晶シンポジウム 最優秀講演賞、CrystEngComm Presentation Award：清水 和久くん（精密有機化学研究室）／第35回 日本セラミックス協会関東支部研究発表会 優秀賞：稲垣 優吾くん、奨励賞：山本 万梨子さん（セラミックス化学研究室）／無機マテリアル学会 第139回 無機マテリアル学会学術講演会 最優秀賞：稲垣 優吾くん（セラミックス化学研究室）／2020年web光化学討論会 優秀学生発表賞：相澤 匠くん

・学生の受賞（ポスター発表）

第68回 高分子討論会 優秀ポスター賞：児島 伶奈さん、平野 智也くん（エネルギー変換材料化学研究室）、磯辺 篤くん、齋藤 卓穂くん（分子集合体化学研究室）／化学とマイクロ・ナノシステム学会 第39回 研究会 優秀研究賞：青山 周平くん（バイオプロセス化学研究室）／

The 11th International Symposium on Microchemistry and Microsystems (ISMM2019) Analyst Poster Award : 大内 貴智 くん (バイオプロセス化学研究室) / 第9回 CSJ化学フェスタ2019 優秀ポスター発表賞 : 山本 幹也 くん、小島 佑樹くん (ソフト材料化学研究室)、小野寺 宥哉くん、中川 雅之くん (エネルギー変換材料化学研究室)、中西 輝くん (触媒化学研究室)、片山 航佑くん、高橋 渉くん、相澤 匠くん (分子集合体化学研究室) / 2019年 日本液晶学会討論会・液晶交流会 虹彩賞 : 森谷 美優さん、秋山 吾篤くん、若葉賞 : 古賀 千晴さん、金田 有義くん、佐伯 勇哉くん (ソフト材料化学研究室) / 第23回 液晶化学研究会シンポジウム 学生ポスター賞 : 秋山 吾篤くん (ソフト材料化学研究室) / 第29回 日本 MRS年次大会 奨励賞 : 佐伯 勇哉くん (ソフト材料化学研究室)、齋藤 卓穂くん (分子集合体化学研究室)

(河合 繁子 記)

■ 共生応用化学コース 就職状況報告

令和元年度(2020年3月)に卒業・修了した学生の進路状況について紹介します。令和元年度の就職活動から、経団連主導の就活ルールが廃止されましたが、2020年3月に卒業・修了した学生の採用選考時期は、前年度と同じ「6月1日以降」となり、大きな混乱もなく学生の就職先および就職先の分野についてもほぼ例年通りでした。学部卒業生は、例年と同様に75名(73.5%)が本学大学院に進学し、他大学進学4名(3.9%)、就職した学生は20名(19.6%)でした。就職先の分野は、化学を含む製造業(8名)、運輸・情報通信(2名)、商

社等(6名)、公務員(4名)でした。博士前期課程の修了生は、74名が民間企業に就職しました。内訳は、繊維・ゴムを含む化学(43名)、機械・精密機器・電気(9名)、自動車・輸送機器(6名)、鉄鋼・非鉄金属(9名)、情報通信(2名)、建設業(2名)、小売業(2名)、特許事務所(1名)で、就職を希望した学生全員が就職しました。

また、複数名(2~3名)を採用していただいた企業も13社あり、これらの企業において本コースの卒業生が活躍している様子がうかがえます。令和2年度(令和3年3月卒業・修了)の学生については、前年度、前々年度と同じ採用活動時期でありましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、合同企業説明会や各種の採用関連イベントが中止されるなど、例年とは異なる状況が続きました。その中でも、オンライン面接などニューノーマルな採用選考活動を通して、多くの学生は順調に就職活動を進めており、9月中旬の時点で就職を希望する学生の大部分は内々定をいただいて進路が決定しています。共生応用化学コースでは、後援会の皆様からのご支援のもと、OB・OGによる仕事セミナーや学内での会社説明会、エントリーシートや面接対策の講習会などを実施し、学生への支援を行っております。企業でご活躍の卒業生・修了生の皆様も、もし会社説明会のご要望などがありましたら遠慮なくお知らせください。卒業生・修了生の皆様と連携しながら、就職をサポートできればと考えております。今後とも、皆様からの温かいご支援・ご協力をいただけますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

(原 孝佳 記)

凡 展

1990年以来、昨年で30回を重ねました。2012年から会場を東京交通会館に移し、出品者数も近年は50名前後の同窓生の皆さんに参加いただいています。

今年はコロナ禍のため、残念ながら10月に予定していた第31回は中止としました。すでに40名を超える申込みをいただいていたが、7月時点で状況が好転する可能性が極めて低く、万が一にも悔やまれる事態を招くことはできないことから、世話人会で苦渋の判断をしました。

凡展には毎年、絵画をはじめとして写真、CG、書、立体造形など、幅広いジャンルの作品が寄せられ、それがこのグループ展の大きな特徴であり、一般来場者とともに、出品者の同窓生や先輩・後輩たちの交流の場ともなっています。

本展開催にあたっては、大学関係者の皆さまをはじめ、同窓生の皆さまのご支援をいただき心より感謝しております。今後とも引き続きましてご支援のほど、よろしくお願いいたします。

来年初での再開を目指していますが、詳しくは概要が固まり次第、工学同窓会のホームページなどを通じてご案内する予定です。



昨年（第30回）の会場の様子

凡展代表：森 崇（専建3回卒）
事務局：葛谷 邦夫（意匠25回卒）
〒108-0073
東京都港区三田4-3-15
電話：03-3453-2567
メール：tsuta-3@nifty.com

松 芸 展

■ 第12回 松芸展のお知らせ

来年2021年4月11日～17日まで、第12回松芸展を有楽町・東京交通会館1階ギャラリーパールルームで開催いたします。今年4月に予定していた第11回松芸展はコロナ禍で開催を中止しました。千葉大建築学科同窓生なら何方でも参加できますので、奮って参加ください。作品は平面作品（油彩、水彩、アクリル、日本画、版画）、立体作品（陶芸、彫刻）を対象としております。昨年の参加者は顧問の森先生、代表の安生満はじめ12名、47点の出展（一人4点～5点、6号～20号）がありました。同窓の方、絵画愛好の方のご来場をお待ちしております。

松芸展代表 安生 満（1954年卒）
事務局 田口 裕一（1962年卒）
〒202-0022 西東京市柳沢3-4-2-203
電話：080-2042-4628
Mail：geelbec@gmail.com

令和元年度工学同窓会事業報告

平成31年4月1日から令和2年3月31日までに実施した主な事業について、以下の通り報告致します。

1. 工学同窓会報の編集・発行

令和元年11月22日に第46号（全32ページ、23,965部）を会員に発送しました。会報には、工学部創立100周年記念事業（令和3年）の趣意書ならびにご寄附のお願いも掲載しました。

2. 令和元年度工学同窓会 総会および懇親会

令和元年5月25日に千葉大学けやき会館にて総会・懇親会を開催しました。総会では、まず平成30年度事業報告・決算報告・会計監査報告があり、原案通り承認されました。次いで、令和元年度の新会長選出が提案され、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ部会より推薦された小柴満信氏が新会長に選出されました。小柴満信・新会長への議長交代のあと、令和元年度事業計画・予算案の提案があり、原案通り承認されました。最後に、校友会活動の報告、100周年記念事業の準備報告およびご支援のお願いがありました。懇親会では、小柴満信・新会長の挨拶、佐藤之彦・名誉会長（工学部長）の乾杯の辞のあと、会員相互の歓談・交流を行いました。

3. 学生活動への支援

例年通り、工学部学生が主体となっている課外活動に対し、5団体（フォーミュラ・プロジェクト、ロボコン、都市と環境とシステム展運営団体、CUAD、卒業設計展2020）に総額100万円を支援しました。このうち2団体（フォーミュラ・プロジェクト、ロボコン）より懇親会にて活動報告が行われました。

4. 新入生・卒業生および退職教員への記念品贈呈

新入生638名に多色ボールペン、男性卒業生566名にネクタイピン、女性卒業生145名にリングを贈呈しました。さらに、長年に渡り同窓会にご貢献いただいた中山茂樹先生（Ⅱ部会）に退職記念として金のネクタイピンを贈呈しました。

5. 工学部への支援

会費徴収等でもお世話になっている工学部の各種活動に賛助金として支援しました。工学部アーカイブ整備にも活用されています。

6. 非常勤講師に対する援助

実社会で活躍されている学外講師による講義の実施のため、講演謝金を援助しました。

7. 千葉大学校友会

令和元年11月2日に千葉大学けやき会館にて校友会総会が開催されました。令和元年は千葉大学創立70周年にあたるため、ホームカミングデーの代わりに70周年記念シンポジウムが開催されました。

8. 工学部創立100周年記念事業

工学部創立100周年記念事業にむけて準備委員会を開催しました。今後の円滑な活動に向けて、同窓会準備委員会を工学部委員会に位置づけ、佐藤之彦・工学部長を委員長とする体制にしました。また、100周年記念事業へのご寄附の受付を始めました。

令和元年度 千葉大学工学同窓会 決算

■収入の部

（単位：円）

費目	予算①	決算②	①-②
前年度繰越金	1,610,479	1,610,479	0
入会金	6,500,000	6,510,000	△10,000
会費	1,900,000	1,597,000	303,000
寄付金	2,300,000	2,036,000	264,000
総会参加費	50,000	34,000	16,000
利息・雑収入	10	0	10
合計	12,360,489	11,787,479	573,010

■支出の部

（単位：円）

費目	予算①	決算②	①-②
会報編集発行	4,300,000	4,731,962	△431,962
入学・卒業記念品費	1,100,000	1,003,690	96,310
総会経費	500,000	401,731	98,269
名簿管理費	216,000	216,000	0
HP費	150,000	162,800	△12,800
部会・支部活動補助費	800,000	638,000	162,000
工学部賛助金	800,000	600,000	200,000
校友会費	150,000	150,000	0
学生援助費	1,000,000	1,000,000	0
非常勤講師援助費	500,000	370,000	130,000
会議費	100,000	56,194	43,806
渉外費	50,000	30,694	19,306
学内懇親会費	100,000	104,520	△4,520
慶弔費	50,000	0	50,000
郵送通信費	600,000	435,359	164,641
交通費	90,000	80,680	9,320
幹事担当部会運営費	50,000	0	50,000
事務員費	1,000,000	980,000	20,000
消耗品費	50,000	29,979	20,021
事務運営費	50,000	0	50,000
事務室備品費	100,000	133,749	△33,749
雑費	50,000	39,430	10,570
創立100周年記念事業準備費	100,000	59,472	40,528
予備費	454,489	0	454,489
繰越金	0	563,219	△563,219
合計	12,360,489	11,787,479	573,010

※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により定時総会の開催が延期されたため、本事業報告は定時総会で承認されていないことを付記いたします。

2020年度工学同窓会定時総会 開催変更と書面審議のご案内

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

同窓生の皆さまには、平素より格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、開催延期していました定時総会につきまして、このたびの新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、同窓生の皆さまの健康と安全を第一に考慮し、皆さまのご出席のもとでの開催を、やむなく中止することといたしました。懇親会も同様に中止いたします。

定時総会の議案につきましては、役員・部会幹事による審議（12月上旬開催を予定）、および同窓生の皆さまによる書面審議をもって、総会議決とさせていただきます。議案および書面審議につきましては、工学同窓会ホームページ（<http://chiba-kougaku-dosokai.jp/>）にてご案内いたします。定時総会用のページへのアクセスには以下のパスワードを設定しています。

パスワード：電子版ではパスワードは非表示にしています

同窓生の皆さまにおかれましては、より一層のご支援とご理解を切にお願い申し上げます。

敬具

工学部改組とこれに伴う同窓会部会の対応について

平成29年度工学部改組による新コース名と対応する各部会、ならびに旧学科の対応関係は以下の通りです。

新コース名称	対応部会	対応する旧学科
建築学コース	第Ⅱ部会	木材・建築・デザイン工学科建築系
都市環境システムコース	第Ⅹ部会	都市環境システム
デザインコース	第Ⅰ部会	図案・彫刻・造形・意匠・デザイン工学科意匠系
機械工学コース	第Ⅲ部会	金属・精機・機械・機械第二・電子機械工学科機械系
医工学コース	第Ⅺ部会	メディカルシステム
電気電子工学コース	第Ⅳ部会	電気・電子・電気電子・電子機械工学科電気電子系
物質科学コース	第Ⅻ部会	ナノサイエンス
情報工学コース	第Ⅵ,Ⅶ部会 第Ⅷ部会	写真・印刷・画像・画像応用・情報画像工学科画像系・画像科学 情報・情報画像工学科情報系・情報画像学科
共生応用化学コース	第Ⅴ,Ⅸ部会	工業化学・合成化学・応用化学・機能材料工学・物質工学

寄附者一覧

(注) 特は特別会員(現旧職員、ただし正会員は除く)、()内は所属部会
令和元年度(平成31年4月1日～令和2年3月31日)

■ 99口 ■	岩崎 有紗 (意建)	関口 洋一 (V)	■ 2口 ■	塚田 英武 (II)
三浦 邦夫 (III)		田中 昌幸 (V)	香西 一雄 (I)	渡辺 光雄 (II)
	■ 7口 ■	阿久津文彦 (V)	山本 豊 (I)	幡 好明 (II)
■ 30口 ■	椎名 國雄 (II)	稲見 一郎 (V)	関 壯一 (I)	村上 五雄 (III)
岡野 宗樹 (III)	馬養 友之 (V)	大谷 博之 (V)	藤田 勉 (I)	高橋 茂 (III)
	■ 6口 ■	飯島 剛 (V)	御園 秀一 (I)	河田 進 (III)
■ 21口 ■	成毛喜一郎 (IV)	入山 隆 (VI)	水野 哲哉 (I)	福田 忠夫 (III)
松六四会(昭和39年工化卒) (V)		平賀 祐二 (VI)	高橋 正 (I)	村瀬 英俊 (III)
	■ 5口 ■	岩田 克彦 (VII)	伊藤 文隆 (I)	湯本 良 (III)
■ 20口 ■	原田 敏男 (I)	郭 國泰 (VII)	佐野 禎彦 (I)	伊集院 忠 (III)
正村 昭孝 (III)	姫野 真一 (I)	佐藤 直也 (VI/VII)	岡田 優 (I)	橋本 茂男 (III)
小野原 勉 (III)	田中 純一 (II)	酒井 伸和 (VI/VII)	北山 睦人 (I)	岩井 隆夫 (III)
近藤 隆明 (V)	小島 健司 (II)	浦部 裕亮 (院全)	寺田 重順 (I)	戸原 葱 (III)
	田邊 宏志 (II)	工藤 泰代 (院全)	西山 正春 (II)	下村 孝 (III)
■ 18口 ■	小泉 和男 (III)	武川 毅 (院全)	長谷部 央 (II)	池田克登志 (III)
大宮 秀一 (V)	森本 敏夫 (III)	鈴木 洋行 (意建)	土屋 明子 (II)	諸橋 久重 (III)
	森本 敏夫 (III)	森下 諒介 (意建)	松本 明 (II)	宮本 茂 (III)
■ 11口 ■	小川 秀司 (III)		安藤 伸治 (II)	蠅庭 正信 (III)
益山 進 (III)	藤代 裕 (III)	■ 3口 ■	内藤 洪一 (II)	吉沼 幹夫 (III)
	新垣 強二 (III)	森 美恵 (I)	浅野 盛治 (II)	根本 一郎 (III)
■ 10口 ■	大野千左人 (III)	西田 義隆 (I)	大林 和彦 (II)	林 静男 (III)
日向野隆三 (I)	佐々木裕幸 (III)	浅野 英昭 (I)	神山 正樹 (II)	山崎 秀夫 (III)
増田 忠良 (I)	山田 裕皓 (V)	小幡 和夫 (II)	中島 將好 (II)	英 聖一 (III)
柳澤 朋夫 (II)	稲木 秀次 (V)	東方 洋雄 (II)	坂口 守夫 (II)	桑原 健郎 (III)
岩澤 昭彦 (II)	福山賛次郎 (V)	山田 憲司 (II)	田口 裕一 (II)	園部 一之 (III)
松谷 正明 (III)	山本 芳正 (VI)	菅野 良司 (II)	金沢 健蔵 (II)	海老原吉弘 (III)
田中 敏光 (IV)	山口 孝子 (VI/VII)	山下 昇 (III)	吉澤 輝三 (II)	緒方 一裕 (III)
佐藤 武幸 (IV)	瞿 成功 (X)	斎田 実 (III)	河津 亘 (II)	中村 一馬 (III)
寺川 隆成 (IV)	吉田 侑基 (X)	武之内教男 (III)	勢木宇太郎 (II)	平井 秀明 (III)
玉沢 学 (IV)		有戸 立也 (III)	三好 尚武 (II)	小林 貞彦 (III)
昭和31工化卒一同 (V)	■ 4口 ■	加藤 幸三 (III)	長田 勝彦 (II)	三代川滋則 (III)
工化40白ばら会 (V)	逸見邦三郎 (I)	笹川 俊勝 (III)	徳田 彰士 (II)	遠藤 範夫 (III)
神山 恵夫 (V)	片岡 昭之 (I)	坂本 和也 (III)	横井 時人 (II)	出口 伸幸 (III)
深石 準 (V)	正法地紀之 (II)	佐藤 龍夫 (IV)	清水 猛 (II)	斉藤 英司 (III)
田中 秀典 (V)	松本 靖司 (II)	隈 久雄 (IV)	大久 徹 (II)	山下 嘉久 (III)
芝田 浩 (V)	黒田 満男 (II)	松嶋 昭 (IV)	渡辺 実 (II)	津下 豊彦 (III)
美濃口正典 (V)	若松 永 (II)	尾崎 元昭 (IV)	二村 陽子 (II)	山澤 智仁 (III)
正田 章 (VII)	神谷 宏紀 (II)	中村 紀雄 (IV)	江本 次幹 (II)	菊池 健二 (III)
橋詰 正芳 (VII)	森 勝一 (II)	高橋 盛広 (IV)	和田 廣昭 (II)	相沢 芳彦 (III)
木下 麻耶 (情報)	彦坂 誠次 (II)	永井 良一 (IV)	和田 高清 (II)	廣瀬 喜明 (III)
	野口 誠治 (III)	保田 広安 (IV)	小林 孝至 (II)	廣橋 光治 (III)
■ 9口 ■	草深 博好 (IV)	杉森 由章 (V)	高橋 八朗 (II)	末永 時和 (III)
大角 忠 (III)	戸石 三春 (IV)	平井 公德 (V)	大家 教正 (II)	赤間 松三 (III)
堀 章彦 (III)	福部 國弘 (IV)	池野 義行 (V)	山本 晃 (II)	鈴木 誠 (III)
大上 登 (III)	飯塚 矩規 (IV)	中村佐紀子 (V)	久保寺 淳 (II)	永田 朗 (III)
柳澤 章 (III)	小西 寛 (IV)	松尾 廣一 (V)	松永 敏男 (II)	内田 彰 (III)
北川浩一郎 (IV)	清水洋太郎 (IV)	高橋 雅樹 (V)	渡辺 正信 (II)	杉田 明彦 (III)
吉田 俊夫 (V)	兼八 薫 (IV)	宮田 義夫 (VI)	石月 謙一 (II)	塩原 正美 (III)
長谷川 治 (V)	中富 仁 (IV)	渡辺 惇 (VI)	若林 晶子 (II)	田村 重雄 (IV)
長尾 輝哉 (V)	林 久雄 (IV)	大野 仁 (VII)	加藤 宏一 (II)	天野 譯博 (IV)
平川 裕 (VII)	中野 和則 (IV)	喜美候部継示 (X)	山辺 佳世 (II)	畔上 栄輔 (IV)
古賀 千晴 (院全)	松尾 弘任 (V)	浜口 暢 (情報)	山崎 真詠 (II)	小笠原弘適 (IV)
	長谷川静史 (V)	水野大三郎 (画像)	大友 一利 (II)	井本 一彦 (IV)
■ 8口 ■	水谷 惟恭 (V)	多喜 命 (電機)	笹谷 輝雄 (II)	金沢 一良 (IV)
小林 良洋 (II)	柳田 利幸 (V)		鳥飼 説夫 (II)	川口 紀 (IV)
森 元 (V)	太田 正和 (V)		安田征一郎 (II)	大滝 正道 (IV)

三國 宏一	(IV)	今城 力夫	(VI)	川添 集朗	(I)	永野 俊男	(III)	仲岸 優	(III)
蔭山 之雄	(IV)	江川 好古	(VII)	池田 訓江	(I)	山崎 良夫	(III)	山口 優	(III)
藤倉 信之	(IV)	木下 堯博	(VII)	安達 知明	(I)	大石巳喜夫	(III)	近藤 信雄	(III)
外井 英雄	(IV)	大庭 幸雄	(VII)	安井 敏	(I)	林 和夫	(III)	佐藤 雄三	(III)
吉田 生雄	(IV)	田口 英明	(VII)	米村 勉	(I)	戸澤 孝壽	(III)	吉岡 洋	(III)
和久津啓治	(IV)	沼野 博文	(VII)	加藤 照子	(I)	日野 俊昭	(III)	山田 陽二	(III)
中山 陽一	(IV)	穠谷 久人	(VII)	伊藤 純子	(I)	松井 雅男	(III)	藤井 卓美	(III)
今田 伸司	(IV)	中島 昭博	(VII)	小嶋 良一	(I)	金子 和弘	(III)	井上 浩一	(III)
佐藤 光一	(IV)	佐藤 行夫	(VII)	山田 雄一	(II)	相馬 一朗	(III)	千葉 全紀	(III)
杉本 和英	(IV)	長谷川隆史	(VII)	熊田 孝雄	(II)	小出 富夫	(III)	加藤 次雄	(III)
相馬 毅	(IV)	高山 蹊男	(VII)	大仁田拓三	(II)	田久保信也	(III)	平出 礼一	(III)
青木 基郎	(IV)	芝木 儀夫	(VII)	堂 健二	(II)	谷本 信雄	(III)	渡辺 信彦	(III)
長野 浩俊	(IV)	山田 秀夫	(VII)	大和田包明	(II)	福島 成次	(III)	福田 昭	(III)
階上 保	(IV)	渋谷 岳人	(VI/VII)	川村 尚夫	(II)	伊藤 修	(III)	広瀬 正敦	(III)
渡辺 優	(IV)	近藤 尚子	(VI/VII)	鈴木 忠道	(II)	柴田 秀雄	(III)	本橋 昭二	(IV)
村上 武志	(IV)	高橋 愛	(VIII)	岩崎 哲朗	(II)	白鳥 邦治	(III)	香村 敏夫	(IV)
加藤 洋一	(IV)	安藤 賢孝	(X)	富永 慶宇	(II)	伊藤 健一	(III)	西塚 晶彦	(IV)
草野 祐一	(IV)	岡野 直美	(X)	田中 修一	(II)	融 成三	(III)	高田 洋	(IV)
芳賀 光雄	(IV)	清水いそ江	(X)	渡辺 泰男	(II)	徳屋 友彦	(III)	茂木 節雄	(IV)
伊藤 一郎	(V)	赤江 信哉	(院全)	川田 暢子	(II)	藤田 尚美	(III)	倉上 一郎	(IV)
浜田 孝夫	(V)	徳田 晋一	(院全)	丹羽 正徳	(II)	松本 嘉己	(III)	田村 均	(IV)
栗原 信介	(V)	鈴木 俊介	(院全)	林 靖男	(II)	米田 喬	(III)	丸山 敏夫	(IV)
片岡 正	(V)	稲垣 友梨	(院全)	藤井 茂	(II)	小口 博義	(III)	前田 稔展	(IV)
鈴木 昭夫	(V)	上村 篤輝	(院全)	清水 四郎	(II)	田川 正洋	(III)	柴 忠敏	(IV)
奥山 敏樹	(V)	川口 晃平	(院全)	加藤由紀子	(II)	本忠 瑞穂	(III)	三宅 正高	(IV)
田辺 敏夫	(V)	鉤流 耕平	(院全)	上坂 省二	(II)	深山 健也	(III)	米須 清英	(IV)
物井 恵一	(V)	間瀬 陽介	(院全)	松崎 徹	(II)	上田 俊弘	(III)	岸田 勇	(IV)
大木 剛夫	(V)	森田 明寛	(院全)	村中 恭一	(II)	遠藤 誠久	(III)	篠崎 國雄	(IV)
成川 攻	(V)	林 優希	(×)	森本 健二	(II)	市川 浩伸	(III)	見月 真人	(IV)
川田 晃嗣	(V)	相田 竜青	(情報)	竹生 敏俗	(II)	岩本 光則	(III)	宮田 正彦	(IV)
浅見 栄二	(V)	大西 拓紀	(情報)	齋藤 光哲	(II)	広瀬 次郎	(III)	岸 勇	(IV)
反保 一雄	(V)	小林 航	(電機)	真柴 正徳	(II)	三宅 伸治	(III)	塚本 允孜	(IV)
府中 裕一	(V)	近野 太郎	(意建)	池澤 信之	(II)	岡野 稔	(III)	榎並 誠	(IV)
相澤 馨	(V)	徳野 友香	(意建)	谷口 寛明	(II)	小間喜三郎	(III)	藤井 盛	(IV)
斎藤 晴夫	(V)	佐々木義典	(職員)	作間 健	(II)	園山 芳	(III)	金澤 伸春	(IV)
川嶋 静雄	(V)			木谷 勤治	(II)	山本 直樹	(III)	塚本 明人	(IV)
三田菜穂子	(V)	■ 1口 ■		田中 明夫	(II)	生駒 達一	(III)	武内 壽	(IV)
岩瀬 章代	(V)	川井 孝二	(I)	賀井伸一郎	(II)	嶋田 英之	(III)	宮治 通雄	(IV)
石井 尚文	(V)	木村 宏	(I)	佐伯 牧子	(II)	岡本 保孝	(III)	岩田 春久	(IV)
加藤 祐一	(V)	渋谷 久紀	(I)	瀬戸 守	(II)	根岸 廣介	(III)	池田 健二	(IV)
佐々木健一	(V)	山田 卓生	(I)	石原 弘仁	(II)	山崎 主雄	(III)	神田 憲治	(IV)
安達 龍二	(V)	高橋 和靖	(I)	田中 健太	(II)	菊地 英俊	(III)	小久保 優	(IV)
竹中 史夫	(V)	酒井 重彌	(I)	田中 絹子	(II)	鈴木 幹人	(III)	立花 研司	(IV)
清水 博之	(V)	鈴木 進	(I)	吉田 英雄	(II)	遠藤 秀年	(III)	橋本 聡	(IV)
鈴木 淳	(V)	溝部 正次	(I)	木下 理智	(II)	大沼 毅	(III)	二宮 功	(IV)
豊島 晴子	(V)	赤瀬 達三	(I)	橋本 康夫	(II)	日向 武夫	(III)	岩瀬 健志	(IV)
河辻 輝之	(V)	伊集 盛善	(I)	西本 好男	(II)	田谷 耕一	(III)	古川 秀樹	(IV)
池田 昌弘	(V)	前川 健	(I)	池田 憲一	(II)	塚越 一基	(III)	佐竹 忠臣	(IV)
吉田 博	(V)	岩瀬 順一	(I)	前原 信達	(II)	田村 健	(III)	鈴木 高德	(IV)
畠 好太郎	(V)	五十嵐幸夫	(I)	太田 達見	(II)	山本 賀彦	(III)	坂原 義夫	(IV)
地曳 広志	(V)	赤羽 元英	(I)	長瀬 悟	(II)	森岡 光	(III)	相馬 敦郎	(IV)
内田美恵子	(VI)	小林 宏司	(I)	関根 誠司	(II)	篠塚 智之	(III)	藤木 仁	(IV)
土屋 元彦	(VI)	斎藤 裕明	(I)	引地 健彦	(II)	俣木 秀久	(III)	久手 俊彦	(IV)
高橋 恭介	(VI)	岡本 浩志	(I)	堀 保	(II)	吉野 耕司	(III)	薄葉 光弘	(IV)
斉藤 光範	(VI)	川畑 伸也	(I)	瀬川二三男	(II)	壱岐 良輔	(III)	松原 聡志	(IV)
宮田 弘幸	(VI)	中仙道太郎	(I)	船井 洋一	(II)	大森 一樹	(III)	鈴木 千春	(IV)
大森 雅久	(VI)	中野 正孝	(I)	斎藤 敏夫	(II)	麻生 正	(III)	大滝 長孝	(IV)
柳沢 栄二	(VI)	松木 恭子	(I)	佐藤 初美	(II)	須斎 慶太	(III)	木村 千秋	(IV)
徳江 雅宏	(VI)	立部 紀夫	(I)	桐谷 治孝	(II)	脇田 康之	(III)	岡村 光祐	(IV)
中村 勝利	(VI)	澤田 均	(I)	藤本 匡	(II)	金指 圭洋	(III)	宮原 一敏	(IV)

鈴木 郁夫	(IV)	香田 聡	(V)	金子 茂	(VI)	下川原厚男	(VII)	長谷川雄祐	(X)
小原 健司	(IV)	北谷 純治	(V)	塚越 初雄	(VI)	新宮領 慧	(VII)	吉井 昭宏	(X)
中村 太一	(IV)	伊藤 忠	(V)	寺沢 賢一	(VI)	緑川 文男	(VII)	岩井 玲子	(X)
上野 文男	(IV)	須藤 邦昌	(V)	日浅日出男	(VI)	植竹 優一	(VII)	塚越愛樹彦	(X)
伊藤 克	(IV)	近藤 清彦	(V)	難波 毅	(VI)	藤森 博	(VII)	弓田 博	(X)
高須 伸夫	(IV)	杉浦 一雄	(V)	小田 透	(VI)	川島 誠	(VII)	山口 英明	(X)
片岡 良彦	(IV)	佐藤 栄司	(V)	斉藤 彰	(VI)	岸 秀伸	(VII)	東山 佳明	(X)
三浦真由美	(IV)	原田 順子	(V)	福田 信	(VI)	仙波 季長	(VII)	山本 諒	(X)
上野 豊	(IV)	須貝 友彦	(V)	平林 俊樹	(VI)	鈴木 敦	(VII)	吉井 孝子	(院全)
市原 勲	(IV)	竹田 和俊	(V)	油井 勇飛	(VI)	多田 尚弘	(VII)	水野 鉄浩	(院全)
福原 寿年	(IV)	浦和茂登男	(V)	渡辺 幸保	(VI)	梨本 一昭	(VII)	宮井 俊平	(院全)
金子 啓三	(IV)	砂原 一夫	(V)	藤井 透	(VI)	中田 規夫	(VII)	北澤 智志	(院全)
藤枝 昌行	(IV)	高月 健一	(V)	井上 充夫	(VI)	大塚 康信	(VII)	稲葉 大貴	(院全)
山崎 和次	(IV)	林 日出夫	(V)	山田 英治	(VI)	足立 茂聡	(VII)	木村 友紀	(院全)
伊倉賢一郎	(V)	高橋比等良	(V)	厚見 透	(VI)	丸山美恵子	(VII)	大島 涼佑	(院全)
杉山 武	(V)	鶴田 利彦	(V)	岡本 道夫	(VI)	岩田 耕平	(VII)	柴田 一樹	(院全)
三枝 赳夫	(V)	遠西 正数	(V)	田村 知久	(VI)	小野 雅行	(VII)	田村佳保里	(院全)
曾我 恒彦	(V)	岡本 芳浩	(V)	今井 淳一	(VI)	北村 孝司	(VII)	増田 健二	(院全)
村雄 弘尚	(V)	三浦 恵美	(V)	春田 昌宏	(VI)	田林 勲	(VII)	大澤 佑介	(院全)
村田 正行	(V)	千代田 修	(V)	林 努	(VI)	足立 裕行	(VII)	和田 賢二	(院全)
森田 良知	(V)	中澤 大地	(V)	村上 隆	(VI)	松本 哲雄	(VII)	牧野 孝宏	(院全)
石塚 洋	(V)	熊田 浩明	(V)	山高 修一	(VI)	九門 明	(VII)	岡 綾子	(メ)
田中 満	(V)	澤野 守	(V)	次田 誠	(VI)	平沢 荘一	(VII)	千葉 大奨	(共生)
原 健	(V)	境 祐司	(V)	大澤 郁夫	(VI)	定田 明	(VII)	松田 高博	(物工)
石川 治男	(V)	片野 彰	(V)	糠沢 隆	(VI)	山本 衛	(VI/VII)	嶋田 涉	(物工)
武内 芳夫	(V)	善場 研也	(V)	糠沢 公子	(VI)	金木 真人	(VI/VII)	佃 えり子	(物工)
中村 幸男	(V)	加藤 崇	(V)	池田 敏夫	(VI)	青木 功	(VI/VII)	永峯 翔	(情報)
香川 喬	(V)	高澤 祐	(V)	市來 逸彦	(VI)	菅原 勝彦	(VI/VII)	中村 巧	(情報)
森元 忠夫	(V)	久保 走一	(VI)	長田 利幸	(VI)	沼本 格	(VI/VII)	志村 祥隆	(画像)
山田 信彦	(V)	吉村 節子	(VI)	高橋 英昭	(VI)	池谷 友仁	(VIII)	武田 圭二	(電機)
沢村 敬一	(V)	山本 之彦	(VI)	半田 隆治	(VI)	倉持 匠弘	(VIII)	峯岸 寛典	(電機)
守 敏男	(V)	山田 義彦	(VI)	照井 與泰	(VI)	佐々木 聡	(VIII)	山本 教介	(電機)
石丸 貞冬	(V)	河野 功	(VI)	中村 甚継	(VI)	佐々木 宏	(VIII)	氏原 芳朗	(電機)
高橋 建司	(V)	高橋 通彦	(VI)	竹原 悟	(VII)	大塚 武	(VIII)	小川 尚記	(電機)
有田 潔	(V)	三村 一俊	(VI)	清時 竹彦	(VII)	西岡 潤二	(IX)	外ノ池拓弥	(電機)
小山 正泰	(V)	原 忠義	(VI)	平本 泰章	(VII)	阿部 勇輝	(IX)	紙谷 珠生	(電機)
小林 敬古	(V)	藤崎 滋	(VI)	黒川 静	(VII)	柳 昭男	(IX)	加藤 寛之	(意建)
牛越 憲治	(V)	地引 勝	(VI)	樋口 宗治	(VII)	白石 雅士	(X)	久良木基広	(意建)
腰山 伊彦	(V)	手塚 辰保	(VI)	柏原 克昭	(VII)	赤石 理	(X)	加藤わかな	(意建)
東 克巳	(V)	山崎 孝	(VI)	河野 幸司	(VII)	西村 典綱	(X)	照井 丈大	(意建)
阿部 良幸	(V)	諸岡 征之	(VI)	田口 慎一	(VII)	江田 隆正	(X)	松井菜月希	(意建)
山崎 泰洋	(V)	的場 峻	(VI)	程谷 隆	(VII)	大木 登	(X)	千葉 真也	(意建)
山本 晋介	(V)	斉藤 延夫	(VI)	原口 米夫	(VII)	安藤 幸次	(X)	橘 祐樹	(ナノ)
野田 賢治	(V)	石田 浩男	(VI)	手塚 景二	(VII)	鈴木 純子	(X)	池田 幸治	(職員)
増田 啓司	(V)	白鳥真太郎	(VI)	林 三千男	(VII)	秋元 文江	(X)		
三好 敬	(V)	野呂伊佐美	(VI)	原 好知	(VII)	高橋 和克	(X)		

100周年記念事業寄附者一覧

平成31年4月1日～令和2年3月31日

※お名前のみ掲載しております。

※振込用紙のお名前の公表の有無について未記入の方のお名前は掲載しておりません。予めご了承ください。

■ 100口 ■

久良木基広
高橋 浩治
立石 好行
神尾 清彦
片桐 徹
渡辺麻理乃
三浦 邦夫

■ 50口 ■

土屋 元彦

■ 30口 ■

室木 巧
椎名 國雄
渋谷 岳人

■ 20口 ■

株式会社千都建築設計事務所

■ 15口 ■

佐々木裕幸

■ 10口 ■

佐々木義典

稲垣 利幸
森田 宏夫
片平 武史
野口 義博
玉井 正義
高橋 大介
片岡 昭之
松本 伸春

岡村 泰昌
齋藤 康夫
山田 明弘
富永 慶宇
岡田 哲
村上 誠人
高石 斌夫
壺岐 良輔

氏原 芳朗
野村 俊宏
坂戸 和朗
長谷川 治
根本 一郎
齋田 實
三好 尚武
中島 昭博
解良 聡
石井ひでみ
賀井伸一郎
大村 幸男
青木 俊夫
長尾 輝哉
古川 秀樹
平林 伸夫
松尾 弘任
西本 好男
市原 勲
野口 誠治
遠藤 和郎
浅井 禎和
大坪美佐子
小川 秀雄
鈴木 高德
戸原 葱
金沢 健蔵
和田 岳弘
関口 洋一
岩崎伊左夫

大久保盛也
二宮 功
小出 富夫
小林 徹
川嶋 静雄
白井 俊雄
杉森 由章
中村 良太
大林 和彦
岡野 宗樹
府中 裕一
坪田 秀彦
三国 政勝
前野 誠一
佐藤 明子
杉本彩二郎
鈴木 千春
山本 衛
渡邊 泰男
佐藤 光徳
松田 和紀

■ 5口 ■
鈴木 進
清水 博之
後藤 辰男
松本 嘉己
若松 永
山岡 史之
有田 潔

阿久津文彦
坂口 秋一
小笠原弘適
笹川 俊勝
山本 教介
鈴木 潔
田村 均
星 建次
森元 忠夫
川口 晃平
富田 明朗
佐藤 光一

■ 4口 ■
有戸 立也
横山 勝重
能崎 純二
物井 恵一

■ 3口 ■
馬場 和幸
麻生 正
福田 忠夫
畔上 栄輔
下村 孝
佐野 禎正
高橋 孝至
小林 信晴
山田 憲司

小野 雅行
草深 博好
志村 祥隆
菊池 健二

■ 2口 ■
遠藤 範夫
林 優希
寺島 孝
大塚 範生
原田 俊丈
瀬戸 守
青木 基郎
厚見 透
半田 隆治
松崎志津子
藤澤 勝博
岡野 稔
近藤 清彦
佐々木健一
柴崎 喜重
三國 宏一
杉田 明彦
上野 豊
塩原 正美
矢地 竹男
和久津啓治
伊藤 修
中仙道太郎
牛尾 洋二

広井 敏男
上原 明雄
齊藤 裕之
坂口 紳一
松永 敏男
赤石 理
梅原 崇一
宮田 正彦
宮本 茂
嶋根 義憲
宗根 晃
金木 真人
和田 侯衛

■ 1口 ■
株本 正昭
増田 啓司
山田 和則
西岡 潤二
伊藤 克
中澤 大地
菅原 勝彦
松井菜月希
神山 秀次
吉田 英雄
曾我 恒彦
俣木 秀久

工学部創立100周年記念事業について

千葉大学工学部の前身は、1921年12月に、官立専門学校として東京市新芝町（現在の港区田町）に設けられた「東京高等工藝学校」です。よって、2021年には工学部は創立100周年を迎えることとなります。工学部では工学同窓会と共同で、工学部創立100周年記念事業を計画しております。本事業の手始めとして、松韻会館改修工事の費用の一部を、本学のSEES基金への寄附を通じて、2016年4月までに実施しました。

また、本事業のために、ご存じの通り2019年度より同窓生の皆さまに寄附金をお願いしております。現時点（2020年9月）までに、約400万円のご支援をいただいておりますが、目標額の10%強に留まっておりますので、さらなるご支援をお願いいたします。

さて、松韻会館改修工事の費用補助とは別に、100周年記念事業の一つとして、創立100周年記念史の出版を計画しております。工学同窓会では創立70周年の際に記念史を出版しておりますので、創立100周年記念史は、最近の30年の工学部の動向を中心に掲載内容を検討したいと考えております。そこで、本記念史に掲載した

い内容、その内容をお書きいただける方の推薦（自薦も含む）、および記念史に掲載したい写真を募集いたします。奮ってご応募ください。

【提供・送付方法】

工学同窓会事務局に電子メールの添付ファイルにてご送付ください。郵送でも結構です。

【連絡・問い合わせ先】

工学同窓会事務局までお願いいたします。

【注意事項】

ご提案いただいた記念史に掲載したい内容、写真は、記念事業委員会にて掲載の可否を慎重に検討いたします。掲載に至らない場合がございますので、あらかじめご承知おきください。

工学部創立100周年事業の具体的な内容につきましては、今後も引き続き本誌を通じて、同窓会員の皆さまにお知らせいたします。

（創立100周年記念事業委員会委員長 小坏）

千葉大学工学部創立100周年記念事業ご支援のお願い 趣意書(再掲載)



千葉大学工学部の前身校「東京高等工藝学校」は、1921（大正10）年12月に官立専門学校として東京市新芝町（現在の東京都港区田町）に創立されました。その後1944（昭和19）年に「東京工業専門学校」と改称され、終戦後1949（昭和24）年5月には、学制改革として公布された国立大学設置法により生まれた新制「千葉大学工芸学部」の母体となりました。翌年、千葉大学「工芸学部」は「工学部」と改称され、今日に至っています。2021（令和3）年に創立100周年を迎えることとなります。

工学同窓会は、この工学部100周年を記念する事業を計画するために、2015（平成27）年5月に開催の総会において「創立100周年記念事業準備委員会」の設置を決議しました。なおこの総会では、100周年記念事業の前倒しとして「工学部松韻会館の改修費補助」の支出が認められています。工学部松韻会館は卒業生の献金により1963（昭和38）年に同窓会館として建設されたもので、老朽化が激しいため耐震補強が必要とされてきました。この改修ならびにリニューアル工事は2016（平成28）年3月に完成をみています。

1992～93（平成4～5）年に行った創立70周年記念事業では、「写真で見る70年史」の発行、記念モニュメント「新しい波」設置、記念植樹、記念講演、記念祝賀会が行なわれました。

以上の経過をふまえて、工学同窓会は100周年記念事業について検討を進め、本年7月の幹事会で、「創立100周年記念事業実行委員会」が組織されることとなりました。また、本年10月には工学部が主体となり工学

同窓会とともに本事業を遂行することが決定され、次の事業を行うこと、ならびにこの事業実行のために卒業生の皆様からのご寄附を募ることが決定されました。

1. 「工学部100年史」（仮称）の発行
2. 記念碑・銘板の設置
3. 記念講演会、記念祝賀会の開催
4. 学生・教職員の教育研究支援ならびに工学部設備の充実

以上事業の目的は、「創立100周年を記念して、本学工学部の100年にわたる歴史を振り返り、その業績を顕彰して後世に引き継ぐとともに、工学部の教育研究活動を支援すること」です。寄附金目標は3,000万円を予定しています。

本事業の実行には皆様のご賛同とご協力が必須です。工学部100周年を意義あるものとして歴史に刻むために、皆様には何卒温かいご支援をいただけますようお願いいたします。

2019年11月

千葉大学工学部創立100周年記念事業委員会
委員長（工学部長・同窓会名誉会長）

佐藤 之彦

工学同窓会会長 小柴 満信

100周年記念事業実行委員長

小 坏 成 一

千葉大学工学部創立100周年記念事業 ご寄附のお願い(再掲載)

「千葉大学工学部創立100周年記念事業」趣意書(前ページ)をご覧ください、趣旨にご賛同いただきまして、何卒ご寄附いただけますようお願いいたします。

■ 寄附金について

- ・個人 1口 1,000円
(2口以上ご寄附いただければ幸いです)
- ・法人 1口 10,000円
(10口以上ご寄附いただければ幸いです)

■ 寄附の方法

100周年記念事業への寄附は、「千葉大学SEEDS基金」を通して行います。ここに集まった皆様からの寄附金が、100周年記念事業の諸経費への支出に充てられます。この度、この方法を採用した理由は、「千葉大学SEEDS基金」への寄附は「所得控除」(下記※1を参照ください)が得られるためです。

寄附は、同封の「千葉大学SEEDS基金払込取扱票」を使用して、金融機関(※2)で振り込みください。これをもって100周年記念事業への寄附となります。

なお、SEEDS基金への寄附はクレジットカードを使用時の振り込みもできます。「千葉大学SEEDS基金」ホームページを使って、以下の手順で行ってください。この際、寄附金の使途を特定しないと100周年記念事業に使われないこととなりますのでご注意ください。

- (1)「千葉大学SEEDS基金」にアクセス
- (2)トップページ中央下部「寄付する」をクリック
- (3)「クレジットカードによるご寄付はこちら」をクリック
- (4)寄付目的のプルダウンから「個別のプロジェクトへの支援」を選択
- (5)支援先のプルダウンから「工学部100周年記念事業への支援」を選択

■ 寄附の特典

- ・個人で10口(10,000円)以上ご寄附いただいた方には「工学部100年史」を贈呈します。
- ・個人で100口(100,000円)以上ご寄附いただいた

方、ならびに法人で50口(500,000円)以上ご寄附いただいた場合は、本学内に設置の銘版にご芳名を掲げます。

※1 【寄附金に対する所得控除(免税措置)】

所得税法上の優遇措置により、「千葉大学SEEDS基金」への2,000円を越える寄附金は、確定申告をすることで、寄附金額から2,000円を差し引いた額が、総所得から控除されます。送金後に大学から領収書が送られますので、確定申告の際にご利用ください。お住まいの都道府県・市町村によっては、所得税のほか住民税の「税額控除」が受けられます。当該の都道府県・市町村にお問い合わせください。

なお法人の場合の寄附金は、全額損金算入が可能です。

※2 次の金融機関では払込(振込)手数料が無料になります。郵便局(ゆうちょ)、千葉銀行、千葉興業銀行、京葉銀行、三菱UFJ銀行、三井住友銀行。

※3 【個人情報の取り扱いについて】

寄附により取得した個人情報につきましては、本学からの領収書とお礼状の送付、寄附者の顕彰に関する業務のほか、本学から寄附者にご連絡する必要がある場合のみに利用します。

【お問い合わせ先】

千葉大学工学部同窓会事務局内

「千葉大学工学部創立100周年記念事業実行委員会」

〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33

TEL 043-254-6358 (月水金10:30~17:30)

E-Mail: chiba-u.kogakudosokai@nifty.com

URL: <http://chiba-kougaku-dosokai.jp>

総会・懇親会のご案内

2021年度工学同窓会の総会および懇親会を下記の通り開催いたします。皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

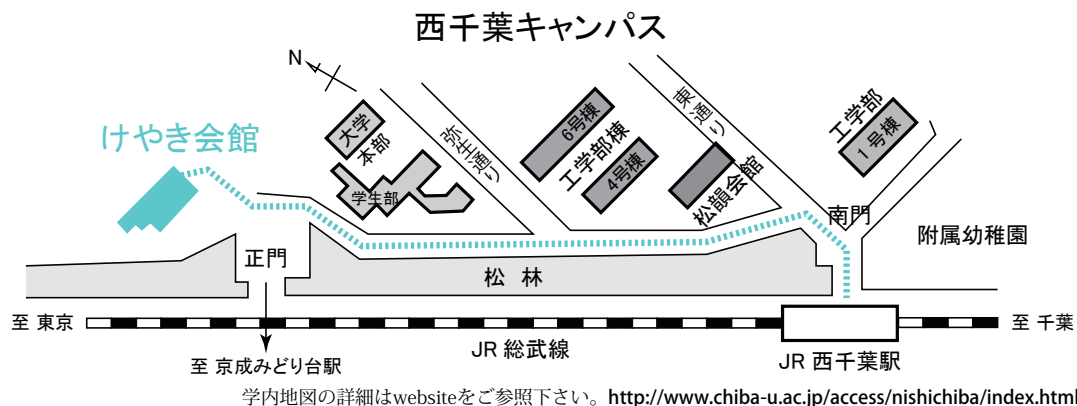
日時 2021年5月22日(土曜日) 受付 13:30より
総会 14:00~14:40 懇親会 15:00~17:00

会場 (受付) けやき会館・1階ホール
(総会) けやき会館・1階大ホール (懇親会) けやき会館・3階レセプションホール

会費 2,000円(当日受付にて)

出席のお申し込みは、同封はがきにて2021年4月30日(金)までに事務局まで必着するようにお願いします。

※状況によって、総会・懇親会を延期または中止する場合があります。



会費納入とご寄附のお願い

●年会費納入のお願い

平成5年度の総会で会則が改正され、平成6年度より、特別会員(同校、同学部現旧教官、ただし正会員を除く)以外の正会員ならびに会友の皆様へ、年会費1,000円を納入していただくことになっております。諸般の事情をご理解下さり、会費をご納入下さいます様、何卒、お願い申し上げます。

年会費は 1,000円です。

●ご寄附のお願い

工学同窓会の運営が安定的に行えますよう、会費に併せまして、皆様からのご寄附をいただければ幸いです。ホームページの充実、工学部資料室設置への協力など、毎年の運営費以外の事業費に充てられればと思います。

●年会費およびご寄付のご送金は

両方とも、同封いたしました郵便振替用紙にてお願いいたします。

なお毎年この振込用紙が同封されますが、すでに本年度分の年会費を前納されている方は必要ありません。

事務局からのお知らせ——おたより募集と住所等変更連絡のお願い

●会員の皆様からのおたよりを募集しています。

同窓生の皆様のための会報とするため、編集委員会では、会員の皆様からのおたよりを随時募集しております。同期会の報告や、皆様の近況、お仕事ぶりなどのお便りを、是非、事務局までお寄せ下さい。誌面の許す限り、掲載させていただきたいと思っております。

●住所、勤務先、電話番号などが変わられた方はお手数ですが、同封のはがき、ホームページ上またはFAXで、同窓会事務局までご一報下さい。

●当同窓会では、会員名簿の管理、発行は(株)サラトに委託しております。最近、(株)サラト以外の業者からも、名簿刊行の案内がありますが、これは当会とは一切関係ありませんので、ご注意下さい。

会報編集委員：下村義弘、加戸啓太、鈴木智、大森達也、大窪貴洋、難波一輝、柴史之(委員長)、劉ウェン、大西俊、田中有弥

発行 千葉大学工学同窓会 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学工学部松韻会館内
電話/FAX 043-254-6358 (月水金 10時30分~17時30分)
E-mail: chiba-u.kogakudosokai@nifty.com

印刷 株式会社サラト 〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172番地 電話079-284-1380 FAX079-224-7746